
学園黙示録～転生者～

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録〜転生者〜

【Nコード】

N67870

【作者名】

シュヴァルツ

【あらすじ】

一人の少年はある日、突然神様と出会った
そこで、いろんなチートをもらった
少年はその力何のために使うのか？
今、始まる・・・

あらすじ

こんにちは作者です。

今回は別物シリーズとして学園黙示録に挑戦してみたいと思います
まだ、恋姫無双の方も完結していませんが、なんとか書いていくの
でそっちの方も読みください

また、主人公は最強シリーズでやっていきたいと思います。という
よりも他のシリーズで書くことが

難しいんです。でも、機会があつたら挑戦してみようと思います。
ですので、どんどんお読みになってください。

また、感想の方も書いてくれると嬉しいのでお願いします。

キャラクター紹介

小田原大和

突然、神様に転生させられた少年でこの物語の主人公である
平野コータと同じ軍事オタクである

神様

大和を転生させた張本人で
暇つぶしで大和を殺し、転生させたが何かと世話をしてくれるいい
人でもある

小室 孝

本来の学園黙示録の主人公である

宮本 麗に振られてから無意味な時間を過ごしている

宮本 麗

孝と幼馴染で想い人だった人物。
今は、孝の親友と付き合っている

毒島 冴子

剣道部の主将で全国大会も優勝しているすごい人
チームの中でサブリーダー的な人
(作者はこの人が好きである)

平野 コータ

主人公と同じ軍事オタクで実銃も使ったことのある少年
銃のこととなると目の色が変わる

高城 沙耶

孝たちと同級生で高飛車のお嬢様だが知識の方は一級品である

鞠川 静香

藤美学園の校医で天然ボケキャラだが
医学の知識は本物で他のキャラを助けることもしばしば

キャラクター紹介（後書き）

以上で書いていききたいと思います

白い世界

小「う、うん？」

気が付くと白い世界が広がっていた
ただ何もない真っ白な世界夢でも見ているかと思った

小「なんだこれ？」

ただ、そういうしかなかった。だって他の表現しろって言われても無理！

？「気が付いたようじゃな」

後ろから聞こえたので振り向くと仙人の格好をした老人が立っていた

小「どちら様ですか？あとここはどこですか？」

？「僕は、お前たちの所でいう神様じゃ、あと、ここは死後の世界じゃ」

小「は？」

思わず聞き返してしまった。だっていきなり自分のこと神だとか言うし

ここは、死後の世界って言ったけど頭大丈夫かこの爺さん

神「なんじゃ？」

小「いや、だっていきなりそんなこと言われても信じられないっていうか。頭、大丈夫？病院に言った方がよくない？」

神「信じておらんということじゃな。ならばこれを見よ」

小「なっ!？」

驚くのも無理はない。いきなり、現れたテレビには死んだ自分の姿があつたからだ

小「どういうことだ!？」

神「だから、さっきから言っておるじゃろ。お主は死んだと」

小「だって、事故とかそういうのに巻き込まれたって記憶はないんだが？」

神「当然じゃ、だって儂が殺したんだもん」

小「なん・・・だと？」

俺は殺された？なぜ？

まだ、新しいエアークン触ってねえんだぞ

小「どういうことだ？」

神「うむ、ずっとこの世界でいたんじやが、暇でな誰かを殺して第二の人生をおくらそうと思った」

小「暇つぶしで俺は殺されたのか!..」

神「まあ、そう怒るでない」

怒るわ！だって何の理由もなしに殺されるなんてたまったもんじゃない！

神「あまり、怒るな。短気は損気じゃぞ？」

小「だったら・・・」

神「最後まで聞け。何も地獄などに連れて行くつもりはない」

小「じゃあ、どうするつもりだ？」

神「転生じゃよ」

小「転生？それってよく二次元創作にでてくるあの？」

神「そう。それじゃ。そこで、お主に問いたい。どこの世界がいい？」

小「無論、学園黙示録で」

神「そんなところに行くのかの。死亡フラグ満載の」

小「ああ、ゾンビを銃で撃つのもいいんだが・・・」

神「だが？」

小「何より、毒島冴子さんがいるのがいい！」

と興奮しながらいった

神「ふむ、人間界というファンと言っやつか」

小「そうそう。」

神「場所は決まった。次に何か付けたい能力とかあるか？」

小「つまり、チートってこと？」

神「簡単に言えばそういうことになる」

小「そうだな。じゃあFATEのギルガメッシュのゲート・オブ・バビロンとアーチャーのアンミリテッドブレイドワークスの固有結界を何でもありで」

神「分かった」

小「後、メタルギアのCQCぐらいかな」

神「そんなに少なくていいのかの？」

小「あ、あと無限金庫なんてものはあるの？」

神「あるぞ」

小「じゃあそれも」

神「承知した。これぐらいかの？」

小「ああ、十分だ」

神「では、あのゲートをくぐれば向こうの世界じゃ気お付けていくのじゃぞ」

小「大丈夫、大丈夫。心配してくれてありがとうな」

そういつて俺はゲートをくぐった

主人公設定

性別 男

身長 174?

性格 親しい人や友人には温厚で優しいが、気に入らない奴・嫌いな奴は徹底的に嫌うタイプで最悪の場合、殺しかけることさえある

趣味 ゲーム サバゲー 軍事関係に関する事を収集すること

特技 射撃 機械の修理 ピッキング 刀鍛冶

銃スキル

銃類のものはすべて熟練の兵士並みに扱える

ゲート・オブ・バビロン改

ギルガメッシュの使っていた物を改造して銃類も出せるようになっている

尚、魔力は無限になっている

無限金庫

金をいくら使っても減らない金庫

アンミリテッドブレイドワークスの固有結界

アーチャーの固有結界を何でもアリにさせた

格闘技

世界各国の武術の良いところだけを合わせた格闘ができる

CQC

ザ・ボスやスネークが使う近接近格闘技を最高の物にした

また、FATEのキャラクターの宝具も扱える

主人公設定（後書き）

とりあえずこんなもんかな？

また、後になったら新しいのを出す予定ですが決まっていますので
要望とかありましたら言ってください

新世界の生活

小「んっ」

目が覚めると目の前にあるのは・・・

小「知らない天井だ・・・」

なんてくだらない冗談をしてる場合じゃなかった。まずは、状況確認と

ベットから降りてすぐ近くに机があった。その上に手紙があった

小「なんだ？」

手紙を広げてみる

神「この手紙を見ているということは起きたということじゃな。ここは、原作開始の一年前になるな。それだけあれば準備ができるじやろ？主人公たちがいる藤美学園には転校生という形にしてあるから心配しなくてもよいぞ」

小「なるほどね」

それだけの期間があれば準備もたやすいということだ。それに、根回しも完璧じゃないかさすがだぜ神さんよ

神「追伸、能力の方はもう使えるようにしてあるから確認してくれ。

それと、家の方はお前の物だから好きに使ってよいぞ。後、分らないことがあったら、念じてくれればいつでも応答するぞ」

小「ほう、この家は自由に使っているのか」

家の周りを見ると普通の一軒家であった

小「とりあえず、家の方は後回しでいいか。先に能力確認しとくか」
まずは、ゲートオブバビロンを開いてみるか

小「ひらけ・・・」

と言った後、後ろを振り向くと・・・

小「おお・・・」

そこには、無数の武器が浮かんでいた。剣から槍まであり、要望通り銃までちゃんとあった。

小「アニメとかで見るのとはわけが違うな」

とりあえず、ゲートの方はOKつと

小「次は・・・」

固有結界でも発動させますか

小「I am the bone of my sword」
（体は剣で出来ている）

すると、背景が巨大な歯車が回っていた

小「チートだなこりゃ」

自分でやっておいて何言ってるんだか

小「とりあえず、こんなもんかな？学校は明日からか準備しとこ」

そういつて明日の準備を開始した

〳翌日、藤美学園にて〵

先「え〵今日はみんなに転校生を紹介したいと思う」

男「先生！女の子ですか？」

先「残念だが違う」

男「ショボーン」

先「じゃあ、入ってくれ」

ガラガラ〵

小「初めまして、転校生の小田原大和です。宜しくお願いします。」

ザワザワ〵

小「？」

なんだ？妙にざわついているな。おかしかったかな？特に女子がざわついている

実は、違う。本人は気が付かないようだが顔が中性的なのできれいに見えるのだ

先「ほくら、静かに、じゃあ大和君は孝の隣についてくれ」

小「分かりました」

といって指定された席に着いた

？「俺、小室 孝よろしくな！」

小「小田原 大和です。よろしく」

それから、主要メンバーである。宮本麗、高城沙耶、平野コータと友達になった

その後が大変であった。他の女子から質問攻めされた

内容的には「彼女はいるの？」などである

放課後、孝が部活動の方を案内してくれた。

俺は、真っ先に行きたい部活を案内してくれと頼んだ

孝「剣道部？」

小「うん、昔じいちゃんから教えられたのずっとやってきたから」

孝「へー、すごいな」

小「そうかな？」

本当はそんな理由じゃないんだけどね

そうこうしてゐるうちに剣道場についた。中からは竹刀のぶつかり合う音が聞こえた。

小「なん?」

孝「ああ、」

と、話してるうちに一人の女性が現れた

「うちに何か用か？」

そう、この人こそが剣道部主将、毒島冴子である

小（冴子さんキタ——！！）

孝「あつ、1年B組の小室孝です。こつちが……」

小「小田原大和です。よろしくお願いします」

「あ、2年B組の毒島冴子だ。して何か用か？」

孝「はい、この子が剣道部を見たいって言うもんですから」

冴「ほう、小田原君剣道はやったことはあるのか？」

小「はい、小さい頃じいちゃんに教えてもらいました」

冴「そうか、では私とやってみないか？」

小「いいんですか？」

冴「ああ、」

その後、冴子さんと一試合交えた。結果は俺の勝ちでした。なんでもかって？

そりゃあ、自分のチー…じゃない、努力と運の結果さ。

そしたら、冴子さんに「剣道部に入らないか？」といわれたので了承しました。

帰るときに、冴子さんに「一緒に帰らないか？」と言われたので内心大喜びしました。

帰り道では楽しく話をしながら帰りました。笑顔が素敵です！！

しばらくしてから、冴子さんと一緒に帰っています。毎日がハッピーです

〽その道中〽

小「あの、冴子さん」

冴「なんだ？」

小「ずっと前から好きでした！付き合ってください！」

冴「え！？」

冴子side

小「ずっと前から好きでした！付き合ってください！」

正直、驚いた私のような者に告白してくるなんて

だが、私もこの子に惹かれていた。初めてあったあの時から・・・

だから私は・・・

冴子side out

どうだったのかはよく分からない。でも、自分の思いをぶつけた後は、返事のみだ。

・・・

しばらく、沈黙が続いた。そして・・・

スッ

小「え？」

手を握られていた

冴「こんな私でよければ付き合おう」

小「やった〜」

マジで！？やったー！！憧れの冴子さんと付き合っことが出来る！

そのまま、手を握りながら帰って行った

新世界の生活（後書き）

こんな風に書きました。
いかがでしょうか？

原作開始！

冴子さんと付き合い始めて一年くらいたった。

あれから、みんな、進級したのだからなぜか麗だけが留年になっていた。

詳しく調べると、教師の紫藤という奴が裏で糸を引いていることが分かった。

バスで会った時には後悔させてやる。フッフ

俺は、2年になり冴子さんは3年になった。付き合いってから最初は大変だった

いろんな人から、「どうやって、口説いたんだ！？」と質問攻めされた

それは、冴子さんも同じであった。だが、今となつては「剣道夫婦」とかいろんな愛称で呼ばれるようになっていた。

だが、そろそろ原作が開始する。そのために一年間準備をしてきたんだ

まず、こつちの世界ではぼすべての免許を取得した（裏で根回ししました！ブイッ！）

その後、家を改装して要塞みたくしました地下4階から、武器庫、食糧庫、車庫、弾薬庫と作り冴子を家に呼んだときは「戦争でもす

る気か？」と言われちゃいました。

あと、世界各国から、軍用車両を買い取りました。

どうやったかって？こちら、無限金庫があるんですよ？お忘れですか？

まあ、ともあれ戦闘準備は整っている。

いつでも来いつてんだ

すると・・・

ガラッ！

孝が入ってきた

先「小室！サボるだけじゃあ飽き足らず授業の妨害か！？」

だが、孝は無視して麗の方に近寄った。

孝「来いよ、逃げるぞ」

麗「ちよつちよとまってよ！何がどうしたっていつのよ！？説明してもらなきゃー」

パアン！！

孝「いいから、来い！」

永「どうしたんだ、孝？」

孝「校門で教師が殺された。やばいぜ」

永「なっ！？それは本当か！？」

孝「こんなウソついてどうする？とにかく逃げるぞ」

そういつて、教室を出て行った。

しばらく沈黙が続いた。

しかし、ここにいてもしょうがない。行動開始するか

小「先生」

先「おっおう。なんだ？」

小「小室達を連れ戻します」

返事を聞かず出て行った。

小「とりあえず、保健室に行くか」

そういつて、保健室の方に足を向けた

しばらくしてから・・・

ア「全校生徒に連絡します！只今、校内で暴力事件が発生しました！すぐに避難してください！繰り返します全校生徒に連絡します！

只今、校内で暴力事件が発生しました！すぐに避難してください！
ぐわっ！やめろ！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！ぎゃあーーーー
ー！！ガッ」

その後で生々しい貪る音が聞こえた。

また、沈黙が続く、チョークの転がる音が聞こえるがその直後、落ちた。

生「うわーーーー！！」きゃーーーー！！！！」

落ちた音をきっかけに全校生徒が逃げ惑う。

我先に逃げようとして前にいる生徒を蹴飛ばしたり、転んで他の生徒に踏みつけられて亡くなっている生徒がいる。

しかし、その死に方の方がましかもしれない。この先にある地獄と比べれば・・・

ともかく、保健室に急がないと！

恋人との再会

〈孝side〉

麗と永と三人で教室を出た後、教師が校内放送で避難命令を出した。しかし、その教師も奴らの餌食となりマイク越しに生々しい貪る音が聞こえてきた

一瞬、沈黙が走るがその直後・・・

生「うあわー！ー！」「きゃあー！ー！ー！」「」

と生徒が廊下に溢れかえった。

そこで、教室棟からではなく管理棟から屋上へ目指すこととなった

〈孝sideout〉

俺は、今保健室の近くの廊下に来ている。廊下には食われたであろう生徒の死体がありその周りに奴らが群がっていた

小「保健室までは50メートル位か・・・」

奴らの数は・・・5体

こんだけ狭いとさすがにやりずらいからあれで行こう

小「I am the bone of my sword .

体は剣で出来ている」

そこで、出したのが二振りの日本刀である。この刀は姉妹剣で由緒正しいものだったとからしいがそんなのは関係ない使えるものを使うそれが、モットーだ

小「はああああ！！！」

そう言つて、一番近い奴の首を跳ね飛ばした。その直後なだれ込むように来たので二刀流居合で決めた。

ドサドサドサ！！

小「ふう、こんなもんかな？」

そして、保健室の扉に手を掛けた。

ガラッ！

？「誰だ！？」

小「待て待て、俺は人間だ。」

手を挙げながら入った

？「あつすみませんってつきり奴らかと」

小「気にすんな、所で名前は？」

？「石井と申します」

？「私は、鞠川静香よ」

小「俺は、小田原大和。よろしくな」

石「あ！剣道夫婦で有名なあの？」

小「ああ、そうだ」

と自己紹介をしている時・・・

ガシャガシャーン！！

石「ヒ！？」

小「下がっている」

そう言っただけの方に向くすると・・・

？「はあああ！！」

ドカッ！バキヤ！

小「真打ちの登場か・・・」

ニヤリと笑いながら言った

冴「大丈夫か？大和」

小「ああ、この通りピンピンだ」

手を広げながら言った

冴「そうか、良かった」

彼女もまた恋人に会えたことに一安心したようだ

しかし・・・

アアアアア

また奴らが来た

小「またか、しつこいね」

冴「私達も人気者ということか」

小「じゃあ、ひと暴れますか」

冴「付き合うぞ。大和」

小「嬉しいね」なら、かつこいいとこ見せますか」

そう言いながら奴らに切り込んでいった

とりあえず職員室へ

保健室から出た俺達は今後の計画を決めることにした。

小「どうやって脱出する？」

冴「とりあえず、歩いては無理だな」

石「どうしてですか？」

冴「校庭にわんさかと奴らがいた。これでは、捕まってやられるのがオチだな」

小「そうだな」

鞠「じゃあ車で出るっていうのは？」

小「そうだな。それが一番だな」

鞠「じゃあ、決まりね。職員室へ行きましょう」

冴「なぜだ？」

鞠「だって、車のキーとかは全部あそこに置いてあるんだもん」

冴「面倒だな」

小「そう言っになって冴子、もしかしたら他の生存者とも合流できるかもしれないしな」

冴「そうだな」

そう言つて職員室を目指すことにした。

く職員室付近へ

やっと、職員室付近まで来た。すると・

？「キャアアアア！！」

全「！？」

急いで悲鳴がした方に走ると、電動ドリルで奴らの頭を貫く高城の姿があつた

高「もう、いや！いやー！！！」

まだ他にも奴らがいたので安全確保に向かつた。

小「冴子は左を頼む！孝と麗は真ん中を頼む！俺は左の奴をやる！」

冴・孝・麗「おう！」

冴「はああ！！！」

ドカツ！

麗「やあああ！！！」

グサッ！

孝「おら！」

バキヤ！

小「行くぜ！」

ザシュツ！

一瞬にして勝負は着いた

小「ふう、」

一息入れた高城の方を見ると

冴「もういい、十分だ。」

冴子が慰めていた

小「冴子、いい母親になるな」

小さな声で言った

それから、俺達は職員室に入り入り口をバリケードで覆った

軽く自己紹介もした

孝「さて、これからどうするか・・・」

麗「とりあえず、テレビで情報を集めましょう」

といってテレビをつけた

とりあえず、みんなの武器を用意するか・

麗「うそ・・・」

孝「どうした？麗」

みんなでテレビを見た

テレビでは、自分たちの町だけじゃなく世界中に広がっていることが分かった

途中で冴子がリモコンで他のチャンネルを回した。丁度中継なのかなウンサーがしゃべっていた

ア「埼玉県では一万以上の死傷者が出ています。知事による・・・」

パン！！

ア「！？、発砲です！ついに警察が発砲を開始しました！でも、一体何に？」

といった後、アナウンサーの悲鳴がして、そのまま砂嵐になった

ア「何か問題が起きたようです。ここからは、スタジオよりお送りします。みなさん可能な限り屋外には出ないでください」

ダウン！

孝「それだけかよ！どうしてそれだけなんだよ！」

高「パニックを恐れてるのよ」

麗「今更？」

高「今だからこそよ。恐怖は混乱を呼び、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして、秩序うが崩壊したらどうやって、動く死体に立ち向かうというの？」

その他のチャンネルでも同じ状況だった。アメリカはホワイトハウスを破棄、洋上に移動したという

孝「世界中で同じことが・・・」

コ「そんな・・・朝、ネットで見たときはいつもどおりだったのに」

麗「信じられない。たった数時間でこんなことになるなんて。きっと元に戻るわよね」

高「なるわけないし」

孝「高城、そんな言い方はないだろ」

高「パニックなのよ仕方ないでしょ」

鞠「パニック」

小「感染爆発のことだな」

冴「大和」

孝「所で、大和」

小「なんだ？孝」

孝「後ろにあるのは何だ？」

小「ああ、これ？これはねー」

大和の後ろに有った物とは？・・・

とりあえず職員室へ（後書き）

次で、学園を脱出します

職員室にて

そこに、あったのは大量の武器であった

孝「どうしたんだ？これさっきまで、持ってたよな？」

小「ああ、これは俺の特殊能力だ」

高「特殊能力？」

小「ああ、俺にはいろんな武器を出せる。こんな風にな」

又オン

全「！？」

後ろにバビロンを出した

孝「どういうことだ？これならもつとはやく・・・」

麗「そうよ！なんで今まで黙ってたのよ！これなら永が死ぬことなんてなかったのに！」

麗は大和に詰め寄った

小「待った。ちゃんと理由を言わせてくれ。この能力はこの事態が始まる前に誰かに話すと未来が変わってしまうんだ悪い方向に・・・」

麗「！？、ご、ごめんなさい・・・」

小「いいって、俺だって早く話したかったが悪い方向には向けたく
なかったからな」

冴「大和・・・」

小「すまないな冴子。お前にも黙ってた」

冴「気にするな。私はお前の恋人だぞ？恋人を信用しなくてどうす
る？」

小「・・・ありがとう」

心が軽くなったような気がする。ほんと、いい人だよあんた

孝「とりあえず、どれが使えるのか教えてくれよ。大和」

小「ああ、」

そして、武器を全員に渡しながら言った

小「孝、お前にはハンマーとM9を渡しておくコータ、使い方を教
えてやれ」

コ「分かった」

といって、離れた

小「麗は青龍偃月刀と孝と同じM9を渡しとこう」

麗「ありがとう」

小「高城はP38ワルサーを渡しておく後、サーベルも渡しておくな」

高「・・・ありがとう」

小「どうした？」

高「あんた、何者？さっきの能力といい」

小「俺は何者でもないよ。この能力だって特典みたいなものだし」

高「そう・・・今は信用してあげるでも、裏切るようなら・・・」

小「ああ、構わず俺を殺せばいい。だが、裏切ることはない俺は、みんなを信用してるからな。もちろん、お前のことも・・・」

高「っ、分かったわ」

そう言っただけで離れた

小「石井はこの銃を使え、USPも、」

石「あ、ありがとう」

小「鞠川先生にはこの銃を渡します」

鞠「でも、私、銃使ったことないから」

小「自分の身に危険が来た時にだけ使ってください。後は俺らがフ
ォローしますから」

鞠「・・・分かったわ」

小「冴子にはこの長曽根琥徹を渡しとくよ、それと小刀もな」

冴「ありがとう。なあ大和」

小「なんだ？」

冴「正直、さっきの話私にもできなかったのか？」

小「ああ、それで悪い方向に向かったら最悪お前を失ってたかもし
れないからな。可愛いお前を・・・だから、黙ってた。本当にすま
ないと思ってる。」

冴「ツノノそ、そうか。それならば仕方ないな」

照れてる姿もかわいいな、今すぐお持ち帰りしてもいい？

え？だめ？

大和は、キュンキュンしていた

コ「大和、こっちは終わったよ」

小「おう、サンキュー、コートにも武器を用意したぞ最高のな」

コ「マジー！？」

コ「タよ目がやばいぞ」

小「ああ、見てくれ！」

ジャーン！

小「釘バット〜」

コ「肉弾戦は無理です〜」

小「おおっとごめんごめん、間違えた」

コ「ふう〜びつくりした」

小「お前にはM4とその下に付けれるグレネードランチャーを渡そう」

コ「いやっほーう！〜」

マジで飛び跳ねてる相当喜んでるな

小「後、500も渡しとくな」

こいつは、モンスター級のマグナムだがコータなら大丈夫だろう

小「それで、俺が」

バレットライフルにランチャーを装備した奴とM60軽機関銃で援護型だ

これなら、フォローに回れるだろう

小「よし、もう少し休憩したらこの学園からおさらばだ」

冴「そうだな」

孝「出るときはどうする？」

鞠「さつき、大和君と話して車で出ることになったの。だから、私の車で・・・」

冴「全員を乗せられる車なのか？」

鞠「うっ・・・」

冴「遠征用のバスはどうだ？壁にキーがささってるようだが」

コ「バス、あります」

小「とりあえず、それでいい」

ともかく、休憩だ。それからいい

学園からおさらば！

少しして、俺達は、行動を開始した。

脱出経路としては正面玄関から一直線にバスに続いていたのでそこから向かうことにした。

〈職員室前〉

ガラッ！

アアアア！！

孝「行くぞ！」

全「応！」

ダン！ダン！

バタツバタツ

途中、教室から出てきた奴らを始末してなんとか、正面玄関付近まで来た。

その時！

？「キャアアアア！！！」

全「！？」

急いで、声のした方向に向かうと複数の男女が奴らに囲まれていた

男「くっ」

女「卓三」

卓「下がってろ」

アアアア！！

ダン！ダン！

バタバタ

孝「おら！」

ドカ！グシャ！

冴「はあ！」

ザシュ！

一瞬で片がついた

女「あ、ありがとうござ……」

冴「大きい声を出すな。奴らが気づく、？まれたものはいるか？」

女「いません。いません」

麗「本当みたいよ彼女たち」

孝「これから、脱出するが一緒に来るか？」

男「は、はい」

それから、なんとか玄関前までたどり着いた。

孝「わんさかというな」

高「連中、音にだけは敏感なのよ。だから、隠れる必要なんてないじゃない」

孝「高城が証明してくれよ」

高「ッ……」

冴「しかし、このまま校舎の中を進み続けても襲われた時に身動きが取れない」

麗「やっぱり、玄関を突き抜けるしかないのね」

冴「誰かが高城君の説を証明しなければならない」

小「俺が行くよ」

孝「どうしてだ？それなら、俺が……」

冴「私が行くぞ。大和」

小「冴子はもしもの時のために残っててくれ」

麗「じゃあ、なんで？」

小「償いかな？」

麗「償い？」

小「さっきのこと、正直騙してたのは悪いと思ってる。皆も、満足はしてないだろうから行動で示せてよく親から言われたかさ・・・」

冴「大和・・・」

小「悪いな冴子。少しばかり俺のわがままに付き合ってくれよ」

冴「心配するな。私はいつでも君の味方だ」

こんな人を恋人にできて俺って幸せもんだなあ

なら、悲しませないようにしますか

小「じゃ、行ってくる」

冴「ああ、気お付けてな」

そう言っただ俺は静かに階段を下りた

アアアアア

そこらじゅうで奴らが動き回っている。

やっぱり、目とかは死んでるのか？

なら・・・

ガン！！

近くにあった靴をロッカーの方に投げた

すると、音のした方向に奴らが動き出した

俺は、みんなに合図を送り玄関の扉を静かに開けた

その時だった！

カァァン！

皆が階段を下りてる時一番後ろにいたさすまたを持った少年が階段にぶつけてしまった！

孝「走れ！」

孝の声で皆走り出した。

高「どうして、声を出したのよ！玄関の奴らだけ片づけてやり過ごせたかもしれないのに！」

ドコオオオオン！

俺は高城に近づいてる奴を倒して言った

小「今の音じゃあ学校全体に響いてるよ」

高「っ・・・」

小「だから、話してる暇があるなら走れ！後、タオルを持った少年！戦おうとするなバスまで走れ！」

男「は、はい！」

そいつって、なんとか皆バスまで走り切った

殿は俺と冴子でやっている

冴「大和！全員乗ったぞ」

ドドドドドドドド！！！！

小「冴子が先に乗れ！すぐ行くから」

冴「分かった！」

そう言っつてバスに乗り込んだ

俺も周囲の確認をして乗り込んだ

小「先生！だし「待ってくれ！」」

声のする方向をみると数人の生徒がこちらに走って来た

孝「誰だ？」

冴「三年A組の紫藤だな」

麗「紫藤?!」

鞠「もう出せるわよ!」

孝「もう少し待ってください!」

麗「あんな奴助ける必要ない!死んじゃえばいいのよ!」

孝「落ち着けてどうしたっていうんだ!？」

そう言ってるうちに紫藤達が乗り込んできた。

孝「もう行けます!」

鞠「いっくわよー」

ブォン!!

高「校門へ向かって!」

鞠「分かってる!」

だが、その手前で多くの奴ら化した生徒がいた

実際に見ると気持ち悪いな

鞠「人間じゃない・・・もう、人間じゃない!!」

と言ってアクセルを思いツきり踏んだ!

そして・・・

ガシャァン!

門を突破し見事学園から脱出に成功したのだ

俺は、一先ず安心した。

俺の仲間に手を出すな！

学園から脱出した俺達は町に向かって走っていた

そこで、金髪不良少年が文句を言ってきた。

金「だからよう！なんで、俺達まで小室達に付き合わなきゃならないんだよ！」

と言ってきた。こういう状況だと他の奴も賛成しかねないんだよな

男「そうだよ！救助が来るまでどこかに隠れていようよ。さっきのコンビニとか」

なんだ？状況を把握してないのか？この馬鹿どもは・・・

と言いつているとバスが急に止まった。

鞠「いい加減にしてよ！これじゃ、運転なんて出来やしない！」

もつともなことを言った

金「んだよう！何見てんだ！やろつって言うのか！？」

あゝ本当につるせえな一遍ぶちのめしてやろうか？

冴「ならば、君はどうしたいのだ？」

冴子が質問を掛けてきた

金「気に入らねんだよ！こいつが！」

孝を指さしながら言った

孝「なんだよ？俺がいつ、お前に言ったよ？」

金「んだと！？こいつ！」

と言つて孝を殴ろうと近寄った

だが・・・

小「ふん！」

ドカツ！

金「ぐあ！？」

小「いい加減にだまっとけやこのクソ餓鬼が」

金髪を睨みながら言った

パチパチ

紫「いやゝずいぶんといい物を見させてもらいました。」

てめえに言われても嬉しかあねえんだよこのクソ野郎が。

紫「しかし、私が言った通りここにはリーダーが必要ということが

分かりますねえ」

高「で？候補者は一人つきりて言う訳？」

紫「私は教師ですよ。高城さん。そして、皆さんは生徒、ここには、絶対的なリーダーが必要なのです！どうですか？皆さん私は皆さんを安全にしてあげられます！」

そういうと、後部座席のほとんどの生徒が立ちあがって拍手した

あれじゃあまるで、宗教だな・・・怖い怖い

麗「嫌よ！そんな奴と一緒にいるなんてごめんよ！」

そう言つて麗がバスから飛び降りた

小「孝！麗のあの状態じゃあ戻つてこない！一緒に着いてやれ！」

孝「わ、分かった！」

そう言つて孝もバスを降りた。

そして、数分後違う道から路線バスが暴走しながら孝達の方に突っ込み横倒しになった

孝達はその先のトンネルに逃げ込んだようだ

小「孝！大丈夫か！？」

孝「ああ、大丈夫だ！それよりほかの所で合流しよう！」

小「場所は？」

孝「東署に7時！無理なら明日の同じ時間に！」

小「よし、分かった！」

そう言った後バスが爆発を起こした

俺は急いで皆のいるバスに乗り込んだ

小「静香先生！他へ回りましょう！」

鞠「え、ええ！分かったわ」

その場から離れて俺達を乗せたバスは大きな橋付近まで来ていた

冴「一時間に一キロってところか・・・」

小「これじゃあ進みようがないな。やっぱり、バスからは降りるか」

高「そうね、大和の言うとおり他のルートから探すしかないわよね」

鞠「皆バスを降りるの？」

小「ええ、そのつもりですよ。第一、紫藤達に付き合う理由はないからな」

鞠「じゃあ、私も連れてって」

小「いいですよ。コータも一緒にいいだろ？」

コ「もちろん！」

冴「私はいつでも、大和と一緒にだ」

嬉しいこと言ってくれるね。喜んじゃうよお兄さん。

あ、今は俺が年下なんだっけ？ まいいか

すぐに、行動を開始するため動いた

その時である

紫「おや、どうしたのですか？ みなさんここで皆と一緒に一致団結して……」

高「お断りしますわ。紫藤先生？」

小「そうそう、元々目的が違うから付き合う義理なんてないからな」

紫「そうですか。それは仕方ありませんね。なんせ、日本は自由の国、ですからね。

ですが……あなたは残っていただきますよ！ 鞠川先生？」

鞠「は、はい？」

紫「ここで、医師を失うのは大きすぎますですから……」

ダン！

そこで銃声が轟いた！

撃ったのはコータと俺である

紫「ひ、平野君と小田原君・・・」

小「なあ、とことん虫が良すぎねえか？あんだ。後ろの生徒たちに何吹き込もうが関係ないがな俺らの仲間に来て手を出すつもりなら生きては返さねえぞ」

俺はやばいくらいに殺気を紫藤にぶつけた。普通の奴なら気絶するくらいに・・・紫藤はなんとか持ちこたえてるけど

紫「で、ですから私は、現状のデメリットをですね」

こいつ、耳はついてんのか？同じことを言わせるんじゃないやあねえよ

もう一発ぶちこんでやろうか？

小「じゃあ、質問だ。仮にお前がリーダーとしてなった場合、まず、どうする？」

紫「そ、それは、ですね。まず、避難所に避難して安全を・・・」

小「はい、アウト」この世界に安全な場所はあるか？答えはノーだ。今の考えで行ったら確実に奴ら化してしまう。そして、その考えはほとんど同じだろう」

紫「くっ」

小「これでも、まだリーダーになるつもりか？やめとけやめとけすぐにお陀仏するさ。そして、そんな奴に俺らの仲間を渡せるかってんだ戯言は他でやってくれ」

小「それと、麗のことだが」

紫「み、宮本さんがどうしたというのです？」

小「なんで、留年したのか調べさせてもらった。糸を辿るとあら、びつくり議員の息子に辿りついた訳だ。どういう意味か分かってんだろうな……！」

そう言つて奴の顔面を思いっきり殴つた！

紫「グハ！」

ドサツ！

そこで、待つたは掛けない。追い打ちを掛ける

小「麗やその家族のこと考えたことはあるか？ないだろう。お前みたいな屑にそんな考えはないからな」

ドカツバキヤ

紫「ゆ……る……し」

え？何？聞こえない

小「よし、コート！手伝ってくれ！”アレ”を掛けるぞ」

コ「オツケ」

そして、二人で屑の体を持ち上げて叫んだ

二「ブレインバスター！！」

ドッカン

紫「ぎゃああああ！！」

あらら、気絶しちゃったよ。まいいか

それじゃあ、

小「冴子、ここは、俺とコートで殿を務める。お前たちは先に行け。」

冴「承知した！」

そう言つて冴子、高城、鞠川先生は降りた。その後俺とコートもバスから降りてクソ野郎どもとおさらばした。

しばらく、歩いていて近くの橋に寄つた時バイクに乗つた孝と麗を見つけて合流した

小「これから、どうする？」

高「そうね、日もだいぶ沈んだし今日はもうどこかで休みたいわ」

鞠「あつそれなら使えるお部屋あるわよ」

高「彼氏の部屋？」

鞠「ち、違うよ。女の子のお友達の部屋！いつも、仕事とか忙しいから鍵を預かって空気の入れ替えとかしてるの」

そこで、俺はなぜかエプロン姿の鞠川先生を想像してしまった。

冴「大和」

ビクッ！

小「な、なんだ？」

冴「今、想像しただろ？」

小「な、なんのことかな？あ、あははは」

なんで、この人は分かるの？ESP使い？まさかね

冴「女の勘だ」

小「や、やだな俺はいつも冴子のことしか考えてないよ」

三十六計逃げるが勝ちだ！

冴「ッ／＼そ、そうか」

頬を染めて可愛いねえ〜お持ち帰りしたい〜

そっいうやりとりをしてるうちに孝が鞠川先生を乗せて場所を確認した。

俺達も移動を開始した

一時の休憩の前に何か忘れてない？

静香先生の案内で先生のお友達のマンションへ移動した俺達

そこで、ある事に気がついた俺

小「あっそういえば・・・」

孝「どうした？大和」

小「この近くに俺の家があっただわ。忘れてた」

みんながズツコケタ

高「もう！どうして自分の家を忘れるのよ！」

小「いやゝ悪い悪い。この騒動のせいですっかり忘れてたんだった。じゃあ俺いったん自分の家に戻るわ！ついでに武器とか持ってきてやるから」

冴「私も行くぞ。大和」

小「分かった。後、コートも来いいろいろと手伝って欲しい」

コ「わかった」

そうして、俺と冴子とコートの三人はおれの家に向かった

といってもマンションから数分離れた場所だが・・・

「自分の家」

数分後、俺の家に辿り着いた

家の周りは死体だらけであった

冴「何があつた？」

冴子も戸惑いを隠せないでいた

小「あゝ大方、家に侵入しようとして返り討ちにあつたんだな」

コ「防犯装置かなんかでも付けてるの？」

小「うん、まあといっても自動機関銃が付いてるだけだ」

コ「それって、防犯って域じゃないよ・・・」

小「そうか？」

確かに、一般の人から見れば要塞にしか見えない・・・

小「まあ、とにかく入ろういろいろ準備しなけりゃあいけないしな」

冴「そうだな」

コ「そうだね」

一行は大和の家に入った

く大和の家の中く

小「よし、じゃあ冴子は先に風呂でも入ってこいよ。そのままじゃ気持ち悪いだろ？」

冴子の服には返り血がどっぷりと付いていて、あまりよろしくない格好になっていた

冴「ありがとう。大和そうさせてもらっ

そう言っ

小「よし、コート俺らは武器、弾薬、車両の整備点検だ」

コ「OK！」

そう言っ

く地下一階 車庫く

パチン！

電気を付けたすると・・・

コ「おおー！？」

コートが驚いた。無理もない世界各国の軍用車両が止められていたから

コ「どうしたの！？これ！」

小「ああ、オークションとかですべて落とした」

そこに止まっていたのは米軍のM1126ストライカーICV、ハンビー、日本の96式装甲車、高機動車、その他諸々と止められていた

コ「M1A2エイブラムズまである。すごいよ！大和、やっぱり君と友達になれて良かった！」

と握手しながら喜んでいた。

小「でさ、とりあえずどれに乗り込もうか悩んでるんだよ。コータ、どうすればいい？」

コ「え？そうだね・・・とりあえず戦車は駄目だね。攻撃力はあるけど車幅と搭乗人数が明らかにオーバーしちゃうからね。次に、ジープみたいな軽車両もだめだね」

小「どうしてだ？」

コ「小回りは利くかもしれないけど、装甲やさっき言った人数制限もあるからね」

小「なるほどな」となると、装甲車やハンビーとかいったものの方がいいか」

コ「そうだね、とりあえず、一台で十分じゃない？静香先生の所にも一台ハンビーがあっただし・・・」

小「そうだな、じゃあとりあえずこのM1126ストライカーでいいかな？」

コ「そうだね」

これで、車両は決まった。次は・・・

↓地下二階 武器庫↓

パチン！

コ「うつひょー！！」

今度は踊ったぞ！？

小「お気に召したかな？」

コ「うん！もう最高！！」

そこには、軍隊にも勝てるんじゃないかってぐらいの武器が勢ぞろいしていた

剣から槍、銃、はたまた大砲までもが置かれていた

コ「そういえば、大和・・・」

小「ん？どうした？」

コ「いくつかは選ぶけど、どうやって持ち出すの？」

小「ああ、そんなことか。ここに入れば問題なかるう?。」

ヒュウン

コ「ああ、すっかり忘れてたよ」

小「しっかりして下さいよ將軍」

コ「うむ!すまなかつたな!」

と、なぜかほのぼのとしていた。

数十分後・・・

小「よし、これぐらいかな」

コ「そうだね。」

目の前の装甲車の中には弾薬と食糧を満載にした

武器類はすべて、バビロンのほうに置いてある

小「じゃあ、俺、冴子を呼んでくるわ」

コ「OK!点検とかしとくよ」

そう言って、一旦コートと別れた

く一階く

小「おい、冴子こっちは終わったぞ」

冴「ああ、今すぐ行く」

小「早く来いよ」居間の方にいるな」

「数分後」

冴「おまたせ」

小「おう、って服は変わってねえな」

冴「なに、向こうで洗濯するさ」

小「そうか、じゃあ出発するか」

俺達は、家を離れて孝達がいるマンションへ向かった・・・

静香先生のお友達の部屋

俺達はストライカーで家を出て、孝達のいるマンションに向かった
数分で着いてしまった。

冴子は服を洗濯するため先に入った

俺とコートも弾薬類をまとめてマンションに戻った。

小「今、戻ったぞ」

女子たちは風呂に入ってるようだ。騒がしいが大丈夫か？

男子は部屋の搜索をしているらしい

コ「孝達は上にいるみたいだね」

小「じゃあ、俺達も上がるか」

そう言って上がった。

上がってすぐのロッカーで孝達は奮闘してるみたいだ

小「よっ孝、石井」

石「お、おかえり」

孝「おっお帰り、どうだった？」

小「んゝまあとりあえず武器の確保はできたよ。それより、なにしてるんだ？」

孝「ああ、このロッカーを調べてたらさ弾薬が出てきたから銃もあるかな？って思ってたさ」

コ「あるね、絶対」

コータがニヤケながら言った

小「とりあえず、開けてみようぜ」

孝「そうだな。手伝ってくれ」

小「OK」

そう言って三人で開けてみた

全「せーの！」

ガキン！

全「うわー！」

ドサッ

孝「痛ってて、あっおい、二人とも！」

小「う、うん？」

コ「うん、はっ!？」キラーン!!

カサカサカサ

小「うお!？」

なんだ!？コータの今の動きは!？まるで、ゴキブリの速さだぞ!？

この体のどこにそんな身体能力が？

コ「やつぱり、あつた」

コータよ。今なら言えるぞ

お前は悪人になれる!!

ガチャン!

コ「スプリングフィールドM1A1のスーパーマツチか、セミオートだけど。まっM14シリーズのセミオートなんて弾の無駄使いにしかないし。」

と一人で銃講義を始めてしまった。

おゝい、帰ってこゝい。孝が茫然としてるぞ

コ「マガジンは20発入る。日本じゃ違法だ、違法。クウ」

と言って次を取り出した

コ「ナイツSR-25狙撃銃か！？いや、日本じゃあそんなの手に入らないからAR-10を徹底的に改造したのか！？ロツカーに残ってるのはクロスボウ！ロビンフットが使ったやつの子孫だよ！バーネットワイルドキャットC-5、イギリス製のクマでも殺せるクロスボウだ！」

孝「これは？」

コ「それは！イサカM-37ライオットショットガン！アメリカ人が作ったマジヤバな銃だ！ベトナム戦争でも活躍した！」

と銃講義がやつと終わったか

小「気が済んだか？」

コ「う、うん、ごめん取り乱した」

そして今、俺らはマガジンに弾を込める作業をしていた

コ「小室も手伝ってよ！面倒なんだ弾を込めるのって」

孝「それを言うなら大和だって」

コ「ああ、大和は今やってるよ。ほら」

と指さした方向をみると、大和はものすごい勢いで弾を込めていた

孝「どんな速さだよ・・・」

小「ん？なんか言ったか？」

孝「いや、それより、二人ともエアソフトガンで勉強したのか？」

二「まさか、実銃だよ」

孝「二人して本物持ったことあんのかよ！？」

コ「僕は、アメリカに行った時、民間軍事会社ブラックウォーターに勤めていたインストラクターに一カ月教えてもらったんだ。元デルタフォースの曹長だよ！」

小「俺は、武器を買い取る時、武器会社の社長と馬が合ってたね。すっかり意気投合して教えてもらったんだ」

孝「二人とも、その方面だけは完璧だな・・・嫌われなくて良かったよ」

二「あははは」

俺は先に弾込めが終了したので見張りをすることにした。

街の状況

今、俺達、男子陣は交替で見張りをしている

夜だから、はっきりと見えないがよく見ると所々で煙が上がっているのが見えた

時折、銃声が聞こえたり、悲鳴が聞こえた

孝「ひどいな」

双眼鏡で御別橋の方を見ていった。

双眼鏡で覗いてみると橋の中央を封鎖して反対側へ行けなくしてるようだ。

奴らがいる方は地獄の黙示録に出てきそうな場面であった。

コ「ん？」

孝「どうした？」

コ「テレビ付けてみて」

と言われてテレビを見た。

丁度、橋付近の映像が映し出されて、集団で抗議を行ってる様子が出た。

「我々は、政府の殺人病に対して」

ア「たった今、橋を封鎖している警察に対してスプラッシュコールを目的とした。団体が出てきました」

その内容は、この騒動が日本とアメリカ両政府が共同して作った生物兵器が漏れてこの事態を起こしたと言ってるらしい

なんとも、馬鹿馬鹿しいことだ。要は現実を見たくないって言うてるようなもんじゃねえか

孝「殺人ウイルスってなんだよ！？人が死んで動き回るっていう理屈、科学的に説明がつくわけないだろ！？」

コ「てことは連中、設定マニアかな？」

小「ただ単に、現実を見たくないってことだろ」

と言って再びテレビの方に視線を映した。

警官が一人出てきて、立ち退きなさいと命令しているようだ

だが、メットのおっさんは立ち退くどころか逆に帰れコールを始めた

後ろの連中も繰り返し帰れと叫んでいる

警官が独り言を始めたと思ったら、いきなり、銃を取り出しメットのおっさんの眉間に突きつけた

そして・・・

パンー！！

撃ち込んだ。

その後は、しばらくお待ちくださいの画面しか出なくなった

ピッ

孝「ひどいな」

コ「どうにもならなくなってる」

孝「すぐに、動くべきか？」

コ「ダメだよ！明るくならないと出た瞬間にやられるかも」

とコータが説明してるとき後ろから近づく気配がした

俺は、慌てて退いた

小「よっと」

コ「ヒッ！？」

？「うつぶん」

孝「わぁ！？」

？「こ・む・ろ・くん んちゅ」

孝に抱きついたのは鞠川先生だった。しかも、今の服装がエロい！
どんなのかって？タオル一枚しか着ていないのだ！

おまけに、酔っている事も分かる。俺はそそくさと退散を開始した

孝「先生、酔ってるでしょ！？って大和！どこに行く！？」

小「お、俺、見張りでもしてくる」

孝「ちょ、待てって！逃げるな！裏切り者！」

孝の悲痛？な叫びを無視してベランダに来た

しばらくするとコートが出てきたが放心状態だ。

・・・中で何があったかは聞かないようにしよう

コートと交代して、俺はキッチンの方に来た

小「うお！？」

そこで見たのは裸エプロもどきをしている冴子の姿だった。

冴「ん？おお、大和かどうした？」

小「お前なくその格好はないだろう」

冴「仕方ないだろ。合う服がなかったのだから」

俺は冴子に抱きつきながら言った

小「そういうのは、俺と二人っきりのときにしてくれよ」ぼそっ

冴「くっくっ！／＼／」

冴子はめっちゃ照れた。

小「じゃあ、もうちょっと見張りしてくるわ」

冴「あ、ああ、気お付けてな」

小「おう！」

くベランダく

また、ベランダに戻ってきた。双眼鏡で覗くと所々で生き残りが闘っていた

御別橋の方は・・・あちゃくさらにひどいことになってるな

ブルドーザーで突っ込んだあとまた、バリケードを作って今度は無差別に発砲してるようだ。

奴らと一緒に住民も撃たれていった。

この惨劇はいつまでも続くのだろうかと心の中に思ってしまった自分

街の状況（後書き）

ついに、あの親子が！？

ありす親子を救助せよ！

あれから、また見張りをしていた。

街の状況はひどくなる一方だ。

孝「くそ、ひどすぎる！」

コ「小室！」

孝「なんだよ？」

コ「撃つてどうするつもりなの？」

孝「決まってる。撃つてみんなを・・・」

小「それは、無理だ。孝」

孝「どうしてだ！お前のその力があるならなおさら・・・」

小「おいおい、俺だって人間だぜ？そんな風に動いていたらあつと
いう間に奴らに囲まれてお陀仏さ」

そして、電気を消しながら言った

小「そして、すべてを救う力など俺たちにはない。生者は光を求め
て群がってくる」

孝「大和はもう少し、同じ考えだと思っていた」

小「勘違いするな。誰もがこんな状況を好きだとは言っていない。ただ、この状況に慣れておけということだ。だが・・・」

孝「だが？」

小「救いたいというなら救え、それがお前の本心なんだろう？」

孝「・・・ああ!!」

孝はそう言って、双眼鏡で見た

俺も、双眼鏡で見た。

あちらこちらで生存者が助けを求めているがどの家も助けようとはしなかった。そして、外の生存者は奴らの餌食となった。

そんな中・・・

小「ん？」

ふと、目に止まった親子がいた。二人は庭のある家に助けを求めた。

俺はバレットライフルを構えて見ていた。

中に入れてもらえないのか。父親がバールを大きく振りかぶって叫んでいた。

そして、中から要請があったのか、ほっとした様子だった。

しかし、中から出てきたのは自家製の槍だった。

それに気づいた俺は迷わず引き金を引いた

ドコーン！！

見事に槍の方に当たり槍は折れてしまった。

だが、親子や中の住人には何が起きたか分からず止まっていた。

中の住人は扉を閉めてしまった

俺はすぐに行動を開始した。

小「孝！、ここからすぐの所に家がある。そこに生存者がいる。その人たちを救って来い！俺とコータはここから援護する！」

孝「わ、分かった！」

そう言つて孝はバイクのある方に行った

コ「大和」

小「なによ？」

コ「救わないんじゃないの？生きるためにすべてを見捨てるんじゃないの？」

小「ああ、そのつもりだったが、どうも性分みたいだ」

コ「なるほどね」

ニツコリとコータは笑った。

数分後、孝がマウンテンバイクで飛び出していった。

俺らは叫びながら構えた

コ・小「ロックンロール！」

ダン！ダン！ダン！

ドオン！ドオン！ドオン！

二人で銃声のオンパレードを開始した。

孝は見事、目的の場所に辿り着いたみたいだが道路の方が奴らで覆い尽くされていた。

コ「どうする？」

小「これは、さすがにバイクじゃ無理だな。まあどっちにしろ・・・」

その時、後ろから声がかかった

？「平野、小田原」

コ「高城さん」

小「高城か」

と振り向いた瞬間、衝撃を受けた！

なぜかって？

静香先生が裸も同然で立っていたら驚くわ！

コ「し、静香、先生！？」

鞠「はあゝい」

とバックを持ち上げた。

おいおい、この小説18禁になるぞ

高「今すぐ、準備して！こんな騒ぎを起こしておいて、ここに居られる筈ないもの！あんた達も準備して！」

コ「は、はい！」

小「りよ、了解」

俺たちにはとても、キツイものだ

（孝side）

俺は、大和に指示されて親子がいる家に向かった

ついて、すぐに奴らを始末したが今度は逆に出れなくなっていた

因みに親子の名前は父親が稀里京、娘は稀里ありすちゃんだ

孝「これから、どうするか」

京「そうですね・・・」

あ「ねえねえ、お兄ちゃん、パパ」

京「どうした？ありす」

あ「出られないの？」

孝「ああ、道路は奴らでいっぱいなんだ」

あ「道路じゃないところ歩けばいいのに」

孝「空でも飛べつてのか？あつ」

京「孝さん？」

俺はある所に目が行った

（孝side out）

今、女子陣とコータ、石井で脱出準備をしている

孝と親子を救助した後はそのまま、川向うにわたるといつ計画だ

しかし・・・

小「あの数は多すぎるだろう・・・」

双眼鏡で見る限り１００体以上はいるんじゃないか？

と考えていると下からライトで照らされた。

どうやら、準備が整ったようだ、なら俺も行きますかね

「マンション前」

小「じゃあ、ストライカーの方に俺とコータ、後は孝とあの親子の救助車とする。ハンビーの方は残りが乗ってくれ」

高「分かったわ」

小「じゃあ、出発！」

そう言って乗り込んだ

ありす親子を救助せよ！（後書き）

続きは次回に書きます・・・

ありす親子を救助せよ！2

「孝side」

俺は、今塀の上を歩いている。この事に気付いたのは、ありすちゃん
の言葉だった

それを、ヒントにやった

孝「京さん。大丈夫ですか？」

京「ああ、大丈夫だ」

しかし、こいつらはどこまでも居やがる。どうすれば・・・

「孝sideout」

俺は、ストライカーで孝たちの居る方に走らせていた。

小「コータ、どうだ？状況は」

コ「見えてきた。奴ら、ウジャウジャいやがるよ」

小「マジか」

そう言っ
て無線機に手を伸ばした

無線機はハンビーの方にも付けておいた

小「こちら、ストライカー応答せよ」

高「なに？その軍隊方式は？」

小「いや、俺の癖なんだ気にしないでくれ」

高「そう、それより、前の状況は？」

小「ああ、ひどいもんだ。」

高「そう、小室たちは？」

小「ちょっと待ってる。コータ」

コ「えーと、あ、いたいた塀の上を歩いてる。すごいなあ」

小「だ、そうだ」

高「ええ！？塀の上にいるの！？」

小「ああ、だがその方が効率がいい」

高「まあ、そうよね」

小「俺たちが突撃するから後ろで待っていてくれ」

高「了解」

小「さて、コータ！衝撃に備えろ！」

「オッケー！」

返事が聞こえたので思いつきりアクセルを踏んだ！

ブ
オ
オ
オ
オ
オ
！
！
！

小「突撃！」

ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！
ツ！

車体の至る所で音が響いた！

そして、ドリフトしながら車体を横に向けた

孝 sides

俺は、音の方に視線を向けると、なんと大和の装甲車が突っ込んできた！

そのまま、車体を横に向けた

孝「む、無茶苦茶やるな……」

ガ
パ
ッ
！

小「孝！早く来い！」

孝「む、無理ゆうなつて！」

これで、俺たちの生存が確定した！

「孝sideout」

俺は装甲車のふたを取って叫んだ！

小「孝！早く来い！」

孝「む、無理ゆうなつて！」

そう言つてゆつくりだが移動を開始した。さて、援護してやらねばな

小「コータ、援護するぞ！」

コ「Ok！」

そう言つてコータはM4で射撃を開始した

俺も”あれ”を出すか

バビロンから出したのはM2キャリバーである。

コータは気付いて興奮した

コ「そ、それは！M2ブローニングキャリバー！今、米軍で使われてる重機関銃だね！」

小「ああ、そくだ！そしてこいつをここにつける！」

ガチャン！

小「さあ、ショータイムだ！」

そう言って引き金を引いた

[illegible]

小「ヒィーハー!!」

撃ちながら叫んだ

あつという間に近くにいた奴らはボロ雑巾になった

そうしてゐる合間に、孝たちがついた

小「川向う行きの最終便だ！乗るか！」

孝「もちろん！」

そういつて装甲車の上に着地した。

その後、稀里親子も乗ったので出発した

こうして、俺たちは一日を生き延びたのだ

今度は街の反対側へ・・・そして武器を新型を・

無事にありす親子を助けた俺達は街の反対側へ行くため、移動していた

くストライカー内部く

京「先ほどは本当に助かりました。私は稀里京、そしてこの子が・
」

あ「稀里ありすです！さっきは本当にありがとう！」

コ「ははっ、本当に元気だねありすちゃんは」

京「それで、今はどこに向かっているのですか？」

小「今、街の反対側に出ようと思っています。川を渡河して、みんなの家族の無事を確認して無事なら救助して脱出しようと思っています」

京「では、私たちも動向させてもらっていいですか？」

小「もちろん！、あつあと自分たちの仲間も紹介しますよ」

京「分かりました」

そう言った話をしていた

く御別橋付近く

橋付近は昨日見た時よりひどいものだった

小「ひどいな」

京「そうですね。私たちもここから出てきたのですが。良かった」

京さん達もここから逃げ出してきたようだ

小「とりあえず、橋の方は行かないほうがいいな」

孝「どうしてだ？」

小「考えてもみる。昨日、あれだけの騒ぎがあったのに、何も無いわけがない」

コ「つまり、奴らが隠れてる可能性が高いってわけだ」

小「そのとおり、あんな所で囲まれたりしたら、いくらこいつでも耐えきれないからな」

とストライカーを叩きながら言った

孝「なるほど、でも橋が使えないんじゃないやあどうしようもないんじゃないか？」

小「だから、川を渡河するって言ってるんじゃないか」

孝「??」

イマイチ分かってないみたいだな。まっこんな常識が通用するのは軍隊のみ、だからな

コ「小室、この装甲車にも後ろのハンビーにもどちらとも水陸両用になっているんだよ」

孝「え？どつちにもか？」

コ「そう、エンジンがやられないように設計してあるんだ。ただし、深いところだとさすが無理だけどね」

小「コータの言う通りだ。だから、深くない所を探しているわけだ」

そう、この車両にも後ろのハンビーにも水陸両用が付いてるのはいいんだが、深い所だとさすがに無理があるからな

小「とりあえず、先に休憩するか」

コ「そうだね、昨日から動きっぱなしだよ」

と言って腹を擦った。そういえば昨日から何も食ってなかったからな

俺は、無線機を取り出して後ろのハンビーに言った

小「こちら、大和だ。誰か応答してくれ」

冴「冴子だ。どうした？大和」

小「ちょっと、休憩しないか？動きっぱなしでさすがに腹が減った」

冴「なら、丁度いい、昨日弁当を作ったんだそれを食べよう」

小「マジで！？やった〜久しぶりに冴子の手料理が食べられる〜」

冴「フフッ楽しみにしておけ」

小「おう！」

そう言つて無線を切つた

そして、近くに河原があつたのでそこで食べることにした

小「それじゃあ」

全「いったきまーす」

各々好きなものを取り食べていった

小「おおっこの卵焼きうまい！冴子のものだな」

冴「よく分かつたな」

小「だって、恋人の手料理だよ。わからない筈がないじゃん」

冴「そうか、」

と言いつつ、嬉しそうな顔をした

それから、みんな食べ終わった

俺は、新しく武器をみんなに渡すことにした

小「よし、みんな新しい武器を渡すから来てくれ」

みんなが集まった。

小「まず、孝だが、お前にはM P 5を渡そう。後、サブでコヨーテを渡す」

孝「サンキュー」

小「次に麗だがお前にはこの槍を渡そう。」

麗「赤い？」

小「それは、ある英雄が使っていた槍だ。名をゲイ・ボルグ」

麗「そんな代物をいいの？」

小「ああ、俺が持つてるより使ってくれた方がこの槍のためにもなる」

麗「分かったわ。ありがとう」

小「あ、後、サブとして、ぐロック18を渡しておく」

麗「ありがとう」

小「高城には、P - 9 0とM 9 3 Rを渡しておく」

高「ありがとう」

小「石井はG3とUSPだ」

石「ありがとう」

小「冴子には物干し竿と日本刀を渡しておく」

冴「ありがとう、これは、もしかしてあの？」

小「ああ、小次郎が使っていたものだ。」

冴「なるほど、見事な出来栄だな。大事に使わせてもらおう」

小「おう、使ってくれ」

小「京さんにはG36Cと44マグナムを渡しておきます」

京「ありがとう」

小「そして、コータがXM8とM870ショットガンを渡しておく」

コ「ありがとう、大和」

小「それで、俺が・・・」

バレットをPTRD1941に変えて後、ダブル・バレル・ショットガンを出せるようにしておこう

これで、何とか戦力強化はできたな

この先、何が出るか分かったもんじゃねえからな

念には念を入れておかないと・・・

そう思う大和であつた

今度は街の反対側へ・・・そして武器を新型を・・・（後書き）

続く・・・

川を渡河中・・・

コ・あ「こげ、こげ、こげよ、もっと漕げよ」ランランラン、川下り」

今、俺達はストライカーとハンビーで渡河をしている。

因みにストライカーの方には俺・冴子・石井・京さんの四人だ。

ハンビーに残りが乗っている。

さっきの歌はハンビーの方から聞こえている。

とても、のほほんとしている。

あ「Row, row, row, your boat. Gently down the stream.
Merrily, merrily, merrily, merrily.
Life is, but, dream」

おっ？今度は英語だな。あの年にして英語が歌えるとは凄いもんだな

コ「Shoot, shoot, shoot, your gun. Kill them all now! BANG! BANG! BANG! BANG!
Life is but a dream」

訳「撃て撃て撃てよ。みんなぶつ殺せー！バン！バン！バン！バン

「あーたまんね！」

「おいおい、いくら替え歌だからって子供にそんなの教えていいのか？ コータよ」

高「そのデブオタ！ 子供にろくでもない替え歌を教えるんじゃない！ 分かってんの？ 元はマザーグースなのよ？」

コ「はい」

あつ怒られた

そろそろ対岸に着くな。連絡しておくか

小「おーい、漫才もいいが。そろそろ対岸に着くぞ」

高「誰が漫才よ！」

高城の文句を無視した。

ブオオン！ダン！

なんとか対岸に着いた。さてみんなを起こすか

小「おーい、対岸に着いたぞ。みんな起きろ」

京「う、うんおはようございます」

石「おはよう、大和」

小「おはよう。さて・・・」

問題はここだ。俺の膝で寝ている美女が一人いる。

服装は昨日のままなので、冴子は裸エプもどきの状態だ・・・

俺の理性が持たん、さっさと起こすか

小「冴子、起きろ」

冴「う、うん」ぼお

まだ、完全に起きていないな

小「よ・だ・れ、垂れてるぞ」

冴「？／／！！！」

だんだんと顔が赤くなっていく

クウゝマジ可愛い！！お持ち帰りしてえゝ！

全国のユーザーさんから怒られるぞ（by作者）

小「すみませんでしたゝ！」

冴「誰に言ってるのだ？大和」

小「いや、なんでもない。それより、外に出ようぜ」

冴「なぜだ？」

小「いや、もう明るいし、服、着替えた方がいいかなって」

冴「／／／」

またまた、赤くなった。

可愛いー！

く河原く

コ「小室、手伝ってくれ、アリスちゃんを降ろす」

あ「あ、あの！」

孝「うん？」

あ「お、おパンツ・・・」

孝「あっ・・・」

ガシっ！！

麗「これだから、男子は！私達も着替えるんだから向こう行ってよ！」

孝・コ「あははっ」

ストライカーを壁にして俺達は終結した

小「これから、どうするか」

孝「ここから、近いのは高城の家だ。まず、そこに行く」

小「じゃあそれで行こう」

女「わあゝ!!」

鞠「お友達の服持ってきたから好きなの着ていいわよ」

・・・

コ「今こそ、お約束の時だ。勇者「俺はまだ死にたくない」」

小「同感だ」

京「同じく」

石「ぼ、僕も」

コ「そんな、みんなひどいよ・・・」

隅で体育座りしてしまった。

さて、この後はどうなる事やら・・・

皆の家族は無事かねえ

町の反対側の状況は？

女子たちが着替え終えたので、周囲の警戒に当たった。

そして、河原からストライカーとハンビーを上げることになったので、俺とコータで先に上がることになった。

ザッザッ

ガチャン！

コ「クリア」

小「いいぞ！」

麗「静香先生」

鞠「いづくわよ」

ブオオ！ガタン！ブオオオオ！！

コ「ラットパトロ・・・うあああ！

ハア、ハア、チュニアにいるのかな？俺、」

小「大丈夫、ここは、日本だ」

こうして、無事にハンビーを上げることになった。

その後でストライカーも上げた

高「橋で防衛できた・・・わけじゃないみたいね・・・」

麗「でも・・・警察が残ってるなら・・・」

高「そうね。日本のお巡りさんは仕事熱心だからね」

麗「・・・うん！」

鞠「これから、どうするの？」

孝「高城は、東坂の二丁目だったよな？」

高「え、ええ」

孝「だったら、一番近い、まずはお前の家だ。だけど・・・その・・・」

高「分かってる。・・・期待はしてない。でも」

孝「もちろんさ。」

孝の言葉に少しは元気が出た様子の高城だった。

今度は、ハンビーを先頭に行動を開始した。

小「おかしいな・・・」

コ「どうしたの？大和」

小「いや、今日の朝から考えていたことなんだが、ずっと奴らに出くわしていない」

コ「あー、確かにそうだね。でも、それがどうしたの？」

小「考えてもみる。河原で、あんなにも大きな音を出したにも関わらず、人っ子一人出てこない。

おまけに、生存者も見当たらない」

確かに、音には敏感な奴らだ。ハンビーのエンジン音や上げるときなんか一番でかい音が出ていたのに回りに変化が見受けられなかった。

さらには、生存者である。うまく、逃げだせたというならそれでいいのだが。ほとんどは御別橋の方に向かっている。

残りの生存者はどこかの家に隠れている可能性が高いのだが、回りの民家やマンションに人の気配が全くない。これは、どういうことか
小「コータ、警戒レベルを上げといてくれ。なにか、嫌な予感がする。」

コ「分かった」

そう言つて装甲車のふたを開けて、双眼鏡で見張ってくれた。

（孝side）

今、俺達は高城の家に向かっている。家族の方はどうなってるか分からない。もしかしたら・・・

いや、駄目だ。希望は最後まで捨ててはいけない。

麗「どうしたの？」

孝「いや、昨日から、ヘリや飛行機が飛び回っていないからどうしたもんな？って」

麗「大丈夫・・・よね」

孝「ああ」

麗「ねえ気づいてる？」

孝「何がだ？」

麗「私達、昨日から出くわしてないわ」

孝「確かに」

昨日から、奴らに出くわしてない。これほど、平和なときはないだろう。

そう思いつつ、ゆっくりと目を閉じた。

その時である。

コ「奴らです！」

無線でコータの声がかかった

コ「距離、右前方、三〇〇！」

また、奴らとの戦闘が始まった・・・

（孝 side out）

小「やっぱり、おいでなさったか」

正直、合わずに済めばいいと思ってたが、甘かった

と思っていると、ハンビーが右に曲がった。高城の指示だろう。

すると、今度は左に曲がった。俺達もその後について行った。

そして、一直線の道に出た。

奴らは所せましといやがった。

ハンビーの方はスピードをあげた。

だが、

麗「駄目！止まってー！」

いきなり、麗が声を上げた。どうしたのだろうか？

すると、ハンビーは左にドリフトしながら曲がった。

道が開けたのでその先をみると一瞬、太陽の光が光った

ワイヤーだ。道のと真ん中にワイヤーが張られていた。

小「ヤバッ!!」

そう言つて、ストライカーを右に移動させた。

孝side

奴らが現れて警戒していたが二丁目に近づくほど奴らが多くなっていった。

孝「くそ! とういうことだ!?! 二丁目に近づくほど多くなってきやがる」

麗「なにか・・・何か理由があるはずよ!」

そう言つた後、道が一直線になった。

高「そのまま、押し切つて!」

ブオオ!!

麗「だめ!・・・止めてー!」

麗が何かに気づいたようだ

その先を見ると・・・ワイヤーだ。道のと真ん中にワイヤーが張られている。

孝「ワイヤーが張られている！左に曲げて！」

鞠「え、ええ！」

そう言った後、車が大きく左に曲がった。そして・・・

ガッシャーン！

ワイヤーに引っかかった。だが・・・

ギギギギギ！！！！

車は止まらない

鞠「なんで止まらないの！？」

京「タイヤがロックされている！ブレーキ離して、少しでもアクセルを踏んでください！」

鞠「え？ブレーキを？」

そう言つてアクセルを踏んだ、

ブオオ！

孝「おわ！？」

危つく吹っ飛ばされるかと思つたぜ。でも・・・

孝「先生！前！前！」

鞠「え？え？」

ガタン！

麗「え？」

その時、車体が前方に大きく傾いて、麗が吹っ飛ばされた！慌てて手を差し伸べるが…

スカツ！

わずかに届かず、麗はボンネットに叩きつけられてそのまま、道路に落ちた。

衝撃が強かったのか、麗は動けないままにいる。

（孝side out）

痛てて。まさか、こんなとこにワイヤーが張られているとはな

おかげで、止まった衝撃でハンドルに鼻をぶつけちゃったぜ

コ「大和、大丈夫！？」

小「ああ、大丈夫だ。それより、孝達が心配だ、援護するぞ」

コ「OK！」

さあ、ここから人間の意地って奴を見せてやるぜ！

増援

俺達は高城の家に行く時、奴らと出くわして急いでいたが、途中、誰が仕掛けたか分からないがワイヤーによって阻まれてしまい、そのまま立ち往生した。

無線機でハンビーの方に連絡を入れる

小「こちら、ストライカー誰か応答してくれ！」

高「こちら、高城よ！大和、そっちは大丈夫！？」

小「ああ、大丈夫だ。そっちは？」

高「車を止めるとき、宮本が車から落下したわ、今、小室が援護している」

小「分かった。こっちの殲滅が終わったら援護する。それまで、耐えてくれ！」

高「分かったわ！」

麗が落ちたのか。急がないと……

さっそく、こいつを使う時が来たな。

俺はバビロンから、PTRD1941を取り出した。

弾は……爆裂弾を使おう。こいつなら大量殲滅できるはずだ

小「コータ！今から、衝撃が来る！しっかり備えろ！」

コ「わ、分かった！」

よし、これで準備が整った。行くぜ！

ガチャン！ガコン！

小「行つけー！」

ドオオオオオオン！

ヒュン！ドッカーン！！！！

小「ヨッシャーー！」

今ので20はやったな・・

よし、このままどんどん行くぞ

＼高城side＼

なんとか、自分の家まで辿りつけるかと思ったけど、甘かったわね。

それにしても誰よ！あんなところにワイヤーを張ったのは！？

おかげで戦わなくちゃいけなくなったじゃない。

無線で大和達の無事は確認はできた。向こうにも集まってるらしい。

その時である

小「行っけー！」

ドオオオオオオン！

ヒュン！ドッカーン！！！

高「な、なに！？」

何、今のは爆弾かしら？

いやでも、爆弾は積んでなかったわよね？

ともかく、こっちには武器はたくさんあるんだから行けるわよね？

＼高城sideout＼

あれから、何発か爆裂弾を撃ったが一向に数が減らない

くそ！こいつらどこから湧いてくるんだ！？

ハンビーの方もやばいつてのに

仕方ない！

小「コータ！こっちは、何とかするから、お前はハンビーの方に行
つてくれ！」

コ「分かった。気お付けて！」

小「お前もな！」

そう言つてコータはストライカーから離れた。

どうするかな？

冴「私が手伝うぞ。大和」

小「冴子・・・でも、この数はさすがに・・・」

冴「大丈夫だ。」

小「そうか、なら俺もお供しますかね」

そう言つて銃をしまった。

冴「でも、獲物はどうするのだ？」

小「大丈夫、ちゃんと用意してある」

そう言つてある言葉を言つた・・・

く冴子sideく

大和は何か秘策でもあるのか？

獲物はなさそうに見えるが・・・

大和は銃をしまつて、独り言のように言った。

小「I am the bone of my sword.
体は剣で出来ている。」

その言葉を言つた瞬間、大和の体が光つた！

冴「なっ!？」

そして、光が収まつた後、大和の手には一振りの獲物があつた・

「冴子side out」

ふう〜久々に使うな。この固有結界、なんでもアリにしたけど、実際に、剣ぐらいしか出してなよな〜

そう思っていると冴子に話しかけられた。

冴「大和、それは？」

小「ああ、これも俺のもうひとつの能力さ」

冴「なるほど、それも教えてもらつてないのだから？」

あれ？なんか、冴子の後ろに般若が見えるな〜

やっぱり怒つてる？

小「すまない、これも秘密にしておかないといけないものだったんだ」

冴「そ、そうか。やはり、この事態が始まる前に話すと・・・」

小「ああ、同じだ。悪い方向になる」

冴「それじゃあ、仕方あるまい。では行くとするか」

小「ああ、」

そう言つて装甲車から飛び降りた。

因みに今使っているのは、獅子王と呼ばれた英雄の物だ。切れ味は抜群！！

小「はあ！！」

ズシャ！！

冴「やあ！！」

ザシュ！！

俺達の接近戦どんどん奴らが倒れていく。だが、一向に数が減らない。

小「畜生、これじゃあジリ貧だな！」

ザシュ！

冴「ああ、そうだな！」

ズシャ！

これじゃあ、いずれやられてしまうな、ハンビーの方も気になる。

一か八か掛けてやるか・・・

小「冴子、ハンビーの方が危ない。奴らを引き付けろぞ」

冴「分かった」

そう言つて音を出しながら、奴らを引いた

小「ほら、こっちだ！」

ギ！ギ！ギ！ギ！

冴「こっちだ！こっちに来い！」

ガアアアン！

アアアアアア

よし、なんとか引いたな。

冴「大和、こっちだ！」

小「応！」

そう言つて階段を昇った。

小「どうだ!？」

しかし、音に引き付けられたのはほんの数体だった。

小「くそ!」

ガン!

小「こつちだって言ってるだろ!」

これは、もうだめかと思った。しかし・・・

?「みんな!下がちなさい!」

新たな増援が来たのだ!

増援（後書き）

続く

回り道

（孝side）

俺達はもう駄目かと思っていた。しかし・・・

？「みんな！下がちなさい！」

とワイヤーの向こうから複数の人間が走ってきた。

麗「消防？」

孝「いや、それにしては物々しい格好だ」

そう言いながらもその人たちの指示に従った。

車は後で回収するというので一安心した

鞠川先生が礼を言う。

鞠「助けていただき本当にありがとうございます！」

？「当然です。娘と娘の友達を助けてくれたのですから」

そう言つて、メットを外した

高「ママ！ママ！」

高城が抱きついた。言わずもがな高城のお母さんである。

俺達は助かったのである。しかし・・・

〔孝side out〕

俺は皆がもう助からないと思っていた矢先に、増援が来たのだ！

しかし、一体誰が？

そう思っていると携帯無線から連絡があった。

小「こちら、大和だ」

高「高城よ。こっちはみんな無事、あなた達も早く来て。」

小「悪い、それは無理だ」

高「どうして!？」

小「こっちには、奴らが嫌というほど、いやがる。そっちに来た救助は期待できない。」

高「分かったわ。」

小「俺と冴子は別ルートから行く。高城の家は、あの城みたいな奴でいいのか？」

高「ええ、そうよ。」

小「分かった。少しばかり時間がかかるかもしれん。それまで待つ

ていてくれ」

高「待ってるから、私の家で待ってるからね！」

小「応！」

そう言っで無線を切った。

冴「しかし、大和」

小「どうした？」

冴「行くにしても、私はこの区域については良く知らない。大和も同じだろ？」

小「安心しな。そういう時のためにこれを用意した」

と言っで小さな端末機を出した

冴「これは？」

小「衛星からの現在の位置を探索できる端末機だ。さっき持ってきた。」

と言っで現在位置を冴子に見せた。

冴「なるほど、これは便利だな。さっそく移動しよう」

小「応」

そう言つて移送を開始した

く東坂一丁目く

小「やっぱり、ここも駄目か」

冴「一度、戻るか？」

小「そうだな、来る途中奴らはいなかった。」

そう言つてきた道に戻つて行つた。

その途中で移動手段が必要になつたので近くにあつた。バイク屋に寄つた

くバイク店く

小「よし、俺はバイクを選ぶ、冴子は必要なものを集めてくれ」

冴「バイクもいいがデートではあるまい？」

小「俺的には嬉しいシュチュエーションなんだがな。」

冴「そう言つな。死んでしまつたら元も公もないぞ？」

小「確かに、じゃあバイクはあきらめますか」

そう言つて奥の部屋に行つた

小「おっこいつはいいんじゃないか？」

そこにあつたのは一台の六輪バギーだった。水陸両用だ

冴「御満足いただけたかな？」

小「ああ、」

そして、必要なものを乗せてバギーでバイク屋を後にした・・・

く川付近く

ブロロロロ！！

冴「だんだん、面白くなってきたな。この後のことも考えてるんだろ？」

小「もちろん！だけど・・・」

冴「けど？」

小「もっと、面白くなるかもな！」

冴「ふっ君といると飽きないよ！」

小「それは、褒め言葉と見ていいのかな？」

冴「ああ、」

うれしいねくなら、もっと面白くするか！

そして、思いっきり音を出して、奴らを引き付けた。

堤防を下ってそこで止まった。

アアアアアア

ゴロゴロゴロ!!

小「はっ、階段は使えるのに急斜面は駄目なのか!」

冴「だが、そうも言ってられまい」

アアアア

人間なだけが位はするであろう急斜面だが奴らにとっては関係ないのかもしれない

小「そう都合よく行かないか」

冴「仕方あるまい」

小「なら!」

ブロロロロ!!

冴「どうする気だ!」?

小「水陸両用を活かす!」

冴「なに!」?

ブォン！！ザブーン！！

小「冴子！大丈夫・・・グハッ！！」

そこにいたのは水に濡れたい女だ・・・例えるならね

冴子の服装は上が征服、下が短いチャイナ服みたいな物で水に濡れて制服が透けて中のブラジ・・・ゲフンゲフン下着が見えちゃっているのだ！

冴「・・・・・・・・」

小「ゴツクン！！」

冴「わ、私も女のだぞ。大和」

小「わ、悪い悪い」

そのまま沈黙が続き途中にあった島みたいな所に上陸した

冴「よく、思いついたな」

小「ああ、奴らは知能はないはずだから泳ぐこともできないだろうって思ってたな」

冴「そうか」

小「とりあえず、俺が見張りをやるよ。冴子は「ハックチュン」ん？」

冴「すまない。体が冷えてしまったようだ。」

小「あっそうだ」

なにか、思いついた様子でバックの中を漁る

小「ほら、これを使えよ」

取り出したのは、薄いタンクトップだ

冴「ありがとう。大和、優しいな」

小「彼女に優しくするのは彼氏の義務！だからね」

冴「ふふっなるほどな」

そう言って休憩した俺達であった。

冴子の闇・・・

川の真ん中にあつた島で休憩していた。俺達だったが、あらかた奴らがいなくなつたので移動を開始した。

く高城の家付近く

今、俺達は高城の家が見えるほどまで近づいた。しかし、近づくほど奴らがどんどん出てきやがる

小「やつぱり、多くなつてきているな」

冴「だが、引き返すわけにも行かぬまい」

小「大丈夫！その曲がり角を曲がればあるところに着くから」

冴「ある所？」

その後、曲がり角を曲がつて行つた

まっすぐ先に、高城の家が見える。その手前には・・・

冴「公園！？」

小「段ボールの家を作るわけじゃあないよ！」

そう言つて公園の中に突入した。

く公園内部く

小「確か、このあたりに・・・あった!」

冴「何があったというのだ?ハッ!」

ザブーン!!

そう、俺が探していたのは噴水である。これで事が進める!

冴「君は、女を濡らす趣味でもあるのかね!?」

冴子が文句を言ってくるが関係ない。このために作戦を思いついたのだから

小「バックパックからガムテープを取って!」

冴「!?!」

一瞬、驚いていたようだがすぐにテープを取ってくれた

ビリッ!ビー!ビリッ!

小「よし、完成!」

ブォン!ブロロロロ!!

エンジン音を出しながら噴水の周りを回り始めたバギー

冴「なるほど、バギーで音を出して引き寄せる作戦だな。考えたな」

小「へへっ」

冴「で、これから、どうするっ？」

小「銃はあまり使わない。隠密行動で頼む。」

冴「なるほど、」

ダッ！

冴「承知した！！」

そう言つてバギーから思いっきり飛んで目の前にいた奴を真っ二つに切り裂いた

ズシャア！

俺もその後続いた。

ズバツ！ズバツ！

どんどん奴らを切り裂いていく冴子。

正直、俺の出番ねえ

が、その時である

冴「ッ！？」

冴子が急に止まった・・・

小「冴子！どうしたんだよ！？」

なんで、奴らを切らない！相手が子供だからか！？

小「クソッ！」

このままでは届かなかったので、仕方なくバビロンからバレットを取り出して冴子の前にいる奴ら（子供バージョン）を撃った！

ドコーン！

小「ふう」

とりあえず、間に合ったが冴子は未だに硬直したままだ・・・

今の音で嗅ぎつけられたな。移動するか・・・

小「こつちだ！」

そう言っ冴子の手を引っ張り、近くの神社まで逃げ込んだ・・・

く神社く

小「ふうくなんとかなったな」

冴「・・・」

冴子はだんまりだ。どうしたのだろうか？

小「とりあえず、着替えろよ。服は乾いたから」

そう言って制服を渡した。

アイコンタクトで向こう側にいると言った

く服、着替え中く

冴「もういいよ」

そう言ってきたので、俺はある秘策を考えた。

小「いやく助かったぜ。あつたぞ冴子」

冴「？何がだ」

小「それはですね・・・」

ガサゴソ

小「これです。」

スッ

冴「？」

まだ、分かってないみたいだな。

俺はそつと近づいて耳打ちした

小「携帯トイレでございますよ。冴子様」

冴「！ぷっふふ、君は・・・」

小「笑うなんて酷いな。それでも冴子の事を思ってたな」

冴「いや、分かっている嬉しい。嬉しいよ」

なんとか、笑ってくれたな。やっぱり、笑ってる方がいい

その後は沈黙が続いた。しかし、それを破ったのは冴子だった

冴「何も聞かないのだな」

小「いや、正直、あんなふうになる冴子は初めてだったからさ。できれば聞きたい、でも冴子が嫌って言うなら言わなくていい」

冴「いや、君にも知ってほしい。聞いてくれるか？」

俺は黙りながら頷いた

そして、淡々と話し始めた

冴「君と出会う前の事だ。私は部活の帰りで強姦魔に遭遇した。そして、そのまま襲われる形になった。だが、木刀で相手の肩と大たい骨をへし折ってやったよ。事情を知った警察は、私を家まで送ってくれた」

小「それなら正当防衛になるんじゃないか？でも、それってさっきの事と何か関係があるのか？」

冴「その事じゃないんだ。私は、楽しかったのだ。人を殺しかけても楽しくてしょうがなかったのだ！それが！真実の私！毒島冴子の本質なのだ！ただ、力に酔いしれただけの女だ！」

小「なんだ、そんなことか」

冴「そんなことって、こんなのと付き合っているのだぞ！君は！」

小「だから、どうした？お前はお前に過ぎない。どんな過去があつたってそんなの俺には関係ない。そんなことで、離れていく男の方が気が知れるね」。冴子には冴子の魅力ってもんがあるんだから」

冴「大和・・・」

小「冴子、お前にどんな過去があつても、俺は離れやしないよ。だから、ずっと傍にいてくれ。」

そう言つて冴子を抱きしめた。

冴「大和・・・ありがとう」

小「良いつてことよ。お互いさまじゃねえか。俺だつて隠してたんだから、能力の事」

冴「ふっそうだな」

なんとか、吹っ切れてくれたかな？

そのまま、夜を明かした・・・

く朝く

小「ふわく」

昨日はそのまま眠っちまったなく

え？あの後、何かしたかって？そんなこと言ったら、18禁になるでしょくこの小説が！

冴「んっく」

小「冴子、起きろ。朝だぞく」

冴「んっおはよう、大和く」

小「おう、おはよう。さっそく移動するかく」

冴「そうだなく」

そう言って神殿の扉を開けた

く境内く

小「よし、このまま裏手から行こっく」

アアアア

なんだと！？どうやって嗅ぎつけた！？

小「くそ！どういうことだ！？冴子、裏手に……」

冴「……っ」

冴子、まだ吹っ切れてなかったようだな。仕方ない！

ザッ！

冴子の前に出る

冴「……大和？」

ザッ！ガシッ！

小「理由が必要なら俺が与えてやる！冴子！お前がどんなに汚れていようと、お前のそばにいてやる！お前を最高の女だと信じぬいてやる！だから、死ぬな！俺を死なせるな！頼む、すべての罪とともに俺と、一緒にいてくれ！」

大声を出しながら言った。

そして……

スッ

冴「ありがとう」

ザッ

冴「嬉しいよ、大和」

そう言って奴らに向き直った。そして・・・

冴「はぁ!!」

ザシュ!ザシュ!

冴(これだ!)
ザシュ!

冴(たまらん!)
ザシュ!

小「冴子!」

冴「はぁぁ!!」

ザシュザシュ!!

冴「濡れる!!」

そのまま、突破して高城の家の近くまで来た。

小「こつちだ。冴子」

冴「大和」

パシッ

冴「責任・・・取ってくれるね?」

小「望むところ！！」

こうして、俺達は高城の家に到着する事が出来た。

THE 高城家

あれから、俺と冴子は無事に高城の家に辿り着いた。

みんな、喜んで俺達を迎えてくれた。

その後、高城のお母さんにも挨拶した。

冴「これから、どうするのだ？大和」

小「とりあえず、現状維持ってとこかな？まっ場合によっちゃあ・・」

冴「ここから、去るか？」

小「ああ、ここの人たちが同じ目的とは限らないし、まっそれはおいおい考えよう」

冴「そうだな」

小「とりあえず、着替えてきたらどうだ？また、洗濯しないといけないだろ？」

そう、俺たちは昨日から、同じ服を着たままだ。高城のお母さんに服を用意させてもらってるらしい

冴「そうだな。じゃあまた後で」

小「おう、」

俺は、冴子と別れてストライカーがある車庫に向かった

小「よう、コート」

コ「ん？ああ、大和か」

小「何やってんだ？こんなところで」

コ「見ての通り銃の調整さ」

と言ってショットガンを掲げてきた。

小「まあ、ほどほどにしておけよ。」

コ「ああ、分かってるって」

そう言いながらも眼は輝いているぞ。

その後、コートと別れて正面玄関に来た。

そこに孝がいたのだが、何やら複雑な顔をしている

小「どうした？孝」

孝「ああ、大和か。聞いてくれよ。さっき荷物を運んでた人たちの手伝ってただけだよ。荷物運んで少ししたらもういいって言われてさ」

小「？それぐらい普通じゃないか？」

孝「その後、もう少し運ぶって僕が言っただけだよ。こういったことは大人がやるからいいよって言われてさ」

確かに引っ掛かるな、その人たちから見れば俺らは、子供・・・どういう意味があるんだ？

小「確かに引っ掛かるな」

孝「だろ？」

小「まあ、それはおいおい考えよう。とりあえず、休んどけば？」

孝「そうだな、そうするよ」

そう言っただけで別れた。

俺はその場に留まってさっきのことを考えた。

小（やつぱり、気になるな。この屋敷の人たちが大人とすれば、俺たちは子供、だとしても何の意味が？）

そう考えていると後ろから、声を掛けられた

？「大和」

小「ん？おお、冴子かどうし・・・」

そこでおれの言葉は止まった。なんせ和服美人が目の前にいたのだから

冴「?どうした」

小「あついや、その・・・に、似合ってるぜすく・・・／／／」

冴「／／／ほう」

小「あ!いや、変な意味じゃなくなてな」

冴「いや、どういう意味でも・・・」

・・・

小・冴「ぷっはははは!」

そこで、久々に笑った。いや、笑ったことは何度もあった。

しかし、こんなにも緩んだ笑いは久々だ。

小「いや、本当に似合ってるぜ。正に、和服美人とはこのことだろうな」

冴「そんなに褒めないでくれ。照れる／／／」

小「謙遜するな。本当のことを言っただけじゃねえか」

そんなことを話していると・・・

高「もういいわ!ママはいつだって正しい!」

バタンツ！！

怒鳴りながら、出てきたのは高城だった

小「どうした？高城」

高「大和。いえ、なんでもないわ！」

そう言って階段を下りて行った

小「どうしたんだ？」

冴「今はそつとしておこう」

小「そうだな。じゃあ、散策でもするか」

冴「ああ」

その後、庭で散策をしていた。俺と冴子だったが。コートがきて高城から話があるらしいと言われたのでコートの後をついて行った。

麗「で？なんで私の部屋？」

孝「しょうがないだろ。動けないんだから」

そう文句を言っていたのは麗だった。車から落ちた衝撃で鞠川先生に薬を塗ってもらっていたらしい。

……さっきの悲鳴は彼女だったのか

鞠「それで？どういうお話？」

高「私たちがこのままでいるかどうかよ」

鞠「ぶほっ！」

わあ！びっくりしたな。吐かないでよ。鞠川先生

冴「当然だな。我々は今、より強い結束と合流した形になっている。つまり……」

小「選択は二つつきりってことか。飲み込まれるか……」

孝「別れるか……でも、別れる必要なんてあるのか？」

バンッ！

高「ここで、見渡せばいいわ、街がどうなっているのかを！」

孝「街は……ひどくなる一方だな」

双眼鏡で眺めていた孝が言う。そして……

孝「手際いいよな。親父さん・右翼の偉い人だけのことはあるよ。お袋さんもすごいし……」

高「ええ、すごいわ。それが自慢だった。今だってそうこれからのこと。明日のことを……でも、それができるなら……」

孝「たか「名前で呼びなさいよ！」」ご両親を悪く言っちゃあいけな

いこういう時だし、大変なのはみんな同じ」

高「いかにも、ママが言いそうな台詞ね！分かってる！分かってるわ！私の親は最高！妙なことが起こったとたんに行動を起こして屋敷と部下とその家族を守った！凄いわ凄いわ本当に凄い！！もちろん、娘のことも忘れてなかったわむしろ、一番に考えたわ！」

ありゃあ、暴走しちゃったよ。高城さん・・・

孝「それくらいに・・・」

高「さすがよ！本当に凄いわ！さすが、私のパパとママ、生き残ってるはずがないから即座にあきらめていたなんて！」

孝「やめろおお！！沙耶！！」

ガシッ！！

高「か・・・は・・・」

孝「お前だけじゃない同じなんだ！いや、親が無事と分かっているだけお前はマシだ！」

高「分かった・・・分かったから離して」

孝「っ・・・悪い」

高「いいのよ。さっす本題に入りましょう」

ブロロロロ

小「誰だ？」

高「そう！この県の国粋右翼の首領、正邪の割合を決めてきた男、あたしのパパよ！」

THE 高城家（後書き）

高城パパ来た〜。外見めっちゃ怖え〜

T H E 高城会長（前書き）

今日から、セリフの前に名前を入れるのを取りやめてみます

THE 高城会長

俺達が、今後のことについて話していると物資を積んだ車列が到着した。

そして、一番前の車から、一人の男が現れた。高城の父である。

名を高城壮一郎

ウィイイイン

「この男の名は土井哲太郎、四世紀もの間、高城家に尽くしてくれた。我が同志であり、友だ！

しかし、救助活動の際、部下を救おうとし、噛まれた！まさに、自己犠牲！人間としては最も高貴な行為だ！」

アアアア

ガシャン！

「しかし、彼は人間ではなくなった！ただひたすら、危険な”もの”へと成り下がった！」

カシャ

「だから、私は・・・我が友へ最後の友情を果たす！」

ズバツ！

ゴトツコロコロ・・・

「さらばだ、友よ！」

グシャツ！

「これこそが、我々の”今”なのだ！素晴らしい友、愛する家族、恋人だったものでもためらわず倒さなければならない。生き残りたくば・・・戦え！！」

そう言つて家の中へと入つて行つた。

「・・・・・・・・」

みんな、沈黙だったが、最初に口を開いたのは、コータだった

「刀じゃ効率が悪すぎる・・・」

「決めつけが過ぎるよ、平野君」

「でも、日本刀は骨に当たつたら欠けますし、3、4人切つたら使い物にならなくなりますよ！」

「たとえば、剣の道であつても結果とは乗数なのだ。剣士の技量、刀の出来そして、精神の強固さ、この三つが高いレベルならば刀は戦闘力を失わない」

「でも、血脂が付いたら・・・」

「お、おい平野」

孝が落ち着かせようとするが・・・

「触るな！！まともに、銃が撃てないくせに！！」

「平野！あんた、いい加減に…」

「くっ」

そう言い残して、平野は走り去った。

「なんだよ、あいつ・・・」

「分かってやれ、平野君も男子なのだ」

「それは、分かってますけど」

「君のそういう所が・・・いや、同じ硬貨の裏表か」

そう言つて冴子は去つて行つた。

「孝」

「なんだよ？」

「あまり、深く考えるな。考えてもだめなら、もう一度コータと話し合えばいい。話し合えば原因が見つかるはずさ」

「・・・ありがとう、大和」

「気にすんな。じゃっ俺も散策してくるわ」

そう言つて、場を後にした。

く庭く

俺はまだ見ていなかった。庭に来ていた。すると・・・

「大和」

「ん？」

池の所に冴子がいた

「やっぱ、似合つてるな」

「よしてくれ」

「謙遜するな。それより何見てんだ？」

「ああ、ここにいる、鯉が素晴らしくてな」

「どれどれ・・・」

見ると、池には三匹の錦鯉がいた。

「小紋龍が素晴らしいと思わないか？」

「んく俺、あんまり鯉とか詳しくないからな」

「そうか。」

しばらく沈黙が続いた

「なあ、大和」

「なんだ？」

「さっきのどう思う？」

「平野がキレたことか？」

「ああ、彼にとって、刀とはどう見えるのかわからない」

「そこは、しょうがないんじゃない？それより、コートは効率の方を気にしてたんだと思うな」

「それはなぜだ？」

「コートにとっての銃っていうのは、一種の表しなんだよ」

「表わし？」

「そつ冴子で言うなら、刀、麗で言うなら、槍、みたいにな。だから、コートにとっては銃、自分にできることがやっと見つかったていうところかな？」

「ほう」

「だから、一時のものだからすぐに立ち直ると思うよ。それより・

」・

「今後、どうするか、だな？」

「ああ、ここにいればみんな、普段の日常が手に入れられるだろう。」

「しかし、一歩外に出たら・・・」

「ああ、地獄だ。今までの世界は失われただろう。永久的に・・・」

「そこで、高城君の設問に戻るわけだ」

「そうだ、このまま、飲み込まれるか、別れるか。どちらかを選ぶことによつて、これからが変わってくる」

「まあ、俺はみんなの考えに従うよ」

「クスッ、大和らしいな」

「そういうリーダー的な素質はないんだよ」

「まあそういうことにしてやろう」

「ああ、そういう「何を、騒いでいる！！」なんだ？」

「あっちの方からだ。行ってみよう。大和」

「ああ、」

「平野 side」

俺は、銃を抱えて裏庭に来ていた。そこで、高城さんの部下の人たち絡まれてしまった

「さつさと、銃を渡さないか！」

「嫌です！」

「なあ、君このご時世だ。そんなにたくさんの銃を独り占めしちゃあ、だめだよ」

「だめです！これは、借り物だからそれに俺は、俺は」

「ちつこのままじゃあ埒があかねえ、おい！」

「ああ、」

このまま、銃を渡してしまったら・・・

そう思った時、

「何を騒いでいる！！」

「か、会長！」

「この、ガキが銃をおもちやと勘違いして・・・」

そこに現れたのは高城のお父さんだった

「少年！名を聞こう！私は高城壮一郎！」

「ひ、平野コータ！藤美学園二年B組、出席番号32番です」

「声に覇気があつてよろしい平野君、ここに、たどり着くまでさぞかし苦労しただろう・・・どうあつても銃は渡さないつもりかね？」

「駄目です！嫌です！銃がなくなったら・・・俺は、俺はまた元通りにされてしまう！自分にできることがようやく見つかったと思ったのに！」

そう、俺は自分にできることがこの事態になつてようやく見つかった。しかし、銃を取り上げられたら、俺は、みんなを守ることでもできなくなってしまう！

「自分にできることとはなんだ!？」

だから、俺は...

「そ、それは・・・」

その時、声が掛った

く平野side outく

「あなたのお嬢さんを守ることです!」

そう言つて孝が現れた

「こ、小室・・・」

「小室？聞いたことある名前だな。娘とは仲良くさせてもらってるようだが」

「ええ、ですが、この地獄から沙耶・・・お嬢さんを守り続けたのは平野です！」

「コータちゃん！」

ガシッ、

アリスがコータに抱きついた

そこで、冴子も言う

「彼の活躍は自分も目にしております。高木総帥」

そこで、俺も言う

「彼は素晴らしい男ですよ。高城会長」

さらに、沙耶が言う

「あたしもよ、パパ。これは、どうしようもないチンチクリンの軍オタだけど、こいつがいなければあたしは、今頃、連中の仲間だった。こいつがあたしを守ってくれた。パパじゃあなくなっただね！」

「高城、さん」

「ふんっ」

そう言つて、高城会長はその場を離れた。

俺は、コートに寄つた

「大丈夫か？コート」

「や、大和」

「声が出れば大丈夫だな」

そう言つて肩を貸した・・・

EMP 攻撃

コータの騒ぎの後、俺と冴子は高城会長に呼ばれて、邸内にある離れへと向かっていた

「なんだろうな？話って」

「たぶん、私に関係することだろうな」

「冴子の？」

「ああ、昔、高城会長は私の父にご指南されたそうだな。多分その話だろう」

「そういえば、冴子のお父さんは？」

「今、国外の道場にいる。」

「え？道場開いてるのか？」

「ああ、」

「すごいな」

そう言っているうちに離れへとついた。

中に入ると高城会長がいた……正直、怖い

「そこに座りなさい」

「失礼します」

そして、後ろから、刀を出した

「これをどう見る？」

そう言つて、冴子に渡した

しばらく、見て

「！これは・・・まことに珍しい」

「見えたか？」

「反り浅く、波紋の浮かぬ切先両刃の小鴉作り・・・小銃兼正、村田刀と見受けます」

「むう、さすが！見立て通り、明治半ばあの村田銃で知られる村田少将が作らせた逸品だ。」

冴子が刀を返すが・・・

「それは、貴女の物だ」

「・・・無礼を承知で申し上げますが、正当な理由がなければ貰い受けません」

「毒島先生のご指南を受けたお礼・・・ということにしてくれないか？」

「それならば、父にお渡しください」

「はっはっは、さすが、毒島先生のご息女だ本音を告げるよりないか」

「申し訳ありません」

「想像はついていよう。不出来な我が娘のことだ」

「確かに、何度も命を救ったことはありますが、彼女に救われたこともあります。そこまで守りたいのであれば常に傍らに置かれてしまえば良いではありませんか。高木令嬢は……ご両親を心より敬い愛しているのですから」

「親子は似るということかな」

「ならば、なおさらあるいは自分ではなく小室君に……彼こそが我々の……」

「幼い頃より見知っている良い少年に育った！しかし……彼はまだ、不安を抱いているように見える」

「迷い……ですか。確かに」

「ところで……」

「はい？」

「彼とはどういった関係なのだ？」

しばらく、俺は空気と化していたがいきなり話を振られた！

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私の名前は小田原大和。冴子とはいいお付き合いをしています」

「ちよっ大和／＼」

「はっはっは、なるほど、冴子さんもいい男がみつかりましたな！」

「た、高城総帥まで！」

「いや、男がいるというのは恥ずかしいことじゃない！むしろ誇るべきだ！どんな時でも支えてくれる男子がいれば！大和君」

「はい」

「私は、毒島家とは、昔からの知り合いだ。ご息女のことともよく知っている。今、彼女の父は海外で道場を開いている。それ故に帰ることがままならない。だから、私から、言っておくどんなことがあっても彼女を守ってほしい」

「ええ、分かっていますよ。俺も冴子にはいろいろ助けてもらっていますからね。冴子が力を必要としてくれるのなら全力で協力しますよ！」

「大和／＼」

その後は雑談になった。

しばらく話し込んでいたが部下の人が来て一緒に出て行った。

「私たちも戻ろうか？大和」

「そうだな」

そう言つて屋敷の方に戻つた・・・

（屋敷）

屋敷に戻つた俺は正面玄関にいた。

なんでも、孝が高城総帥に自分たちの両親を捜すと言つた所、快く承諾してくれたらしい

今、冴子も着替えに行っている

「よう、孝」

「大和、悪いな。僕の我儘に付き合ってもらつて」

「いってことよ。ここに居るよりみんなといた方が楽しいからな。それに・・・」

「それに？」

「俺以外でストライカーを動かせる奴いるか？」

「あつ確かに」

「だろ？」

と話していると麗がやって来た

「なんの話？」

「ああ、大和の装甲車の話をしてた。というよりも大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫よ。それより装甲車の話って？」

「俺の装甲車、俺以外に動かせる奴いるか？」

「いないわね」

「だろ？もしかしたら、大人数なるかもしれないのに」

「ええ、そうね。ありがとう大和」

「気にすんな」

そう話していると全員が集まった。

その時！

「！」

タッタッタッタ

麗が急に走り出した

「麗！？」

麗の後を追うとそこには、ボコしたはずのクス野郎がいた

「お久しぶりね。紫藤先生？」

「み、宮本さん・・・御無事で何より」

「ねえ、先生。私がどうして、銃剣を使えるか知ってる？銃剣も習っていたからよ！負け知らずのお父さんに！」

そう言つて銃剣を頬に突き付けた

そして、言い続けた

「何事にも動じないお父さんが、私に泣いて謝ったのよ！自分のせいで留年させたとね！」

「麗！」

孝が動こうとしたが俺が止めた

「大和！何すんだよ！」

「これは、本人が決めなければならないことだ。他人が横槍を入れるもんじゃない」

「くっ」

しかし、紫藤がこう言ってきた

「さ、殺人を犯すつもりですか？警察官の娘でありながら殺人犯に・
・」

「あんなんかに言われたくないわよ！」

「ならば、殺すがいい!!」

そう言って出てきたのは高城会長だった

「その男の父親とはいくつかの関わりがある。だが、今となっては
無意味だ！望むなら殺せ！私も必要なら殺す！」

そう言って下がった。

これは、麗自身が決めなければならないからな

時が止まったようにも思える。ただ、長い沈黙

そして・・・

スウ

麗の銃剣が下がった。

「それが、君の答えなのかね？」

「殺す価値もありませんから」

そう言って俺達のもとに来た

でもな〜なんか癩に触るんだよな〜そうだ!!

「高城会長」

「なんだね？大和君」

「あの屑を一発殴らせていただけませんか？」

会長の目を見て言った

「分かった。好きなようにせい」

よし、判決が下った！

「よう、クズ野郎」

「や、大和君」

「これで、最後にしてやるよ。オラァ!!」

そう言つて火事場の馬鹿力の如く渾身の一撃を屑の顎にかました

「ぶべらあ!!」

ひゅ〜ドサッ

「あゝすつきりした!!高城会長、もういいですよ」

「うむ、承知した！お前たちは去れ！後ろにいる生徒もだ。本来な

ら鍛えなおしてもよかったが今は、そんな暇などない！！乗ってたバスで去れ！！」

そう言つてクズ野郎を乗せた一行は高城邸より追い出された

すつきりしたな〜と思つていと

「大和」

「ん？」

「ありがとう」

「気にすんな。奴の顔を見たら無性に殴りたくなっただけだ」

「うん！」

そう言つて離れて行つた

入れ替わりに冴子が来た

「どうした？冴子」

「いや、とつてもかつこよかったぞ。大和」

「冴子に言われると照れるな〜」

冴子も妙にすつきりした顔になっていた

その時

「あー！」

鞠川先生がいきなり大声を出した

「どうしたの？せんせー」

「お友達の電話番号今、思い出したのよ」

と手を振って言った

「それより、携帯、携帯」

「あっはい」

と言って孝が携帯を渡す。

勢いよく取って番号を押し始めた鞠川先生

「えーと1がここで、2がここで・・・」

と、とても遅い番号を押しながら言った。そこでコータが・・・

「かわりに押しましょうか？」

と言ったが

「分からなくなるから邪魔しちゃだめ！」

と言った

数分後

プルルルル

「はい、もしもし?」

「リカ、良かった、繋がった!」

何とか繋がったようだしばらく終わらないであろうと思った。

その時!!

ピカーッ!!

「な、なんだ!?!」

孝が叫ぶ

「これは、もしかして!?!」

ここに、人類は本当の闇に直撃する・・・

THEデッドライン

〱洋上空港〱

私は南リカ、警察の特殊部隊S A Tの狙撃部隊に所属している。

一仕事終えて空港内で葉巻を吸っていると携帯が鳴り出した

「はい、もしもし？」

「あゝリカ！？良かったゝ繋がったゝ」

相手は私の親友鞠川静香だ

「静香？今、どこにいるの？私の部屋？」

「んゝんゝあそこはもうだめ。あつ鉄砲とか借りちゃってるけどゝゝ」

「それより、今どこにゝゝゝ」

いるの？と言いかけて急に電話が切れた。

ふと、外を見ると空が光っていた。これは、まさか！？

すると、一般市民から説明を求められた

「おい、今の光はなんだ？あんた、警察だろう？」

「簡単なことよ・・・ふうー」

葉巻を吸いながら言った

「今日から世界は本当の闇そのものになるのよ。」

く高城邸く

「一体どうしたってんだ!？」

孝が叫ぶ

「これは、もしかして!？」

高城は気付いたように言う。俺も同じ答えだろう

「高城は気付いたようだな」

「ええ、てことは大和も？」

「ああ」

他は分かってないようだが・・・

「なあ、沙耶一体何がどうしたってんだ？」

「あれは、EMP攻撃よ」

「「「「EMP攻撃?」「」「」」

みんなが同じ口調でいう。ていうかコータ、お前も分かってなかったのかよ……

そこで、俺が答える

「日本語で言うなら電磁波パルス攻撃とも言っ。この攻撃は核弾頭を空中で炸裂させ。中に入っている電磁波が地球の磁力で引っ張られ多くの地域にある電子機器を破壊してしまう攻撃だ」

「そう、そしてその電磁波を受けたら最後、電子機器は死ぬわ」

俺と高城の説明に麗が反応する

「てことは、携帯電話もだめなの!？」

「携帯どころか車、パソコンまでもがダメよ。恐らく発電所も死んだでしょうねEMP対策しているなら話は別でしょうけど、そんなの、自衛隊と政府機関のごく一部しかしてないわ」

「そ、そんな……」

皆が暗くなる。そりゃあそうだろう今まで頼りにしてきた電子機器が使えないんだからな……

そこで、後ろから、声がかかる

「直す方法はあるのか？」

高城会長だ

「焼けたプラグを変えれば動かせる車はあるかも、たまたま電磁波の影響を受けていない車もあるかもしれない」

「すぐに調べる」

「はっ」

「沙耶！」

「なっなに？」

「この状況でよく冷静に物事を判断できた。褒めてやる」

「ありが・・・」

最後までお礼を言おうとしたが思わぬ出来事が発生した

「ば、バリケードが　！」

大声で言う部下の人達

正面を見ると多くの奴らがいた

「ひっ、く、来るな、来るなぐわああ!!」

一人の部下が奴らの餌食となった

「門を閉めよ！死人どもを中に入れるな！」

「しかし、会長。今、門を閉めれば、外にいる連中を見捨てること

になります!」

「中に入れて、全滅になったら元も公も言わん!やれ!」

そう言つて部下に指示を出す

ガララララ!ガシャン!

「一人入ったぞー!」

アアアア

「ポケットの中には……」

ダァン!!

「GUN、ひ・と・つ」

と親指を上げながら悪人面で言うコータがいた

門を閉めたおっちゃんは……

「すまない、少年、俺が間違つてた!」

と言つた。

「会長!奥様!獲物をお持ちしました!」

と言って部下の人が武器を持ってきたみたいだ

そして・・・

バサッビリッ

とスカーフを放り、スカートを破った！

そこで俺は・・・

「ビューティフル！」

と言った。

「何言ってるのよ！あんたは！」

ゴン！

「アウチ！」

と漫才を繰り広げたところで高城のお母さんから支給品があった

「お使いなさい。沙耶ちゃん」

と言って銃を渡してきた。すると、コータが・・・

「ル、ルガーP08のオランダ植民地軍モデルだー！」

興奮しながら言った

「どうして、ママが銃なんか持ってるのよー！」

「OK！」

「「fire!!」」

ダン！

ドコーン！

こうして、俺達のデッドラインが開始された・・・

しばらくは、防いでいたが奴らがどんどん湧いてくる。

孝が叫ぶ

「これじゃあ持たないな！」

そこで、俺が叫ぶ

「ああ、そうだな！」

ドコーン！

「弾も持ちません！」

ダン！

「どうするの？」

グサッ！

「一度、引こつ。会長がいる二階に避難するんだ!!」

そう言つて俺達は高城会長がいる二階に避難した

「会長、隣家の方も調べましたがまだ、襲われてません! 門の補強も可能です!」

「うむ、これより敵中を突破し隣家に向かう! 生き残りたい男どもは武器を取れ! 女子供はその後に続け!」

「パパ、それより立てこもつた方が…」

「守つて何の意味がある? あの鉄門を破られたのだぞ! 立て籠もつても破られ、食われるだけだ!」

そう言つて前に向き直つた。

後ろには大人たちに混じり俺達がいた

「親孝行するのではなかったのか? 小室君」

「っ!」

「ためらわず、自分の生きたいように行くがいい」

「はい!」

「平野君」

「!?!」

「娘を・・・頼む！」

「パパ、それってどういう・・・」

ガッ パァン！

高城のお母さんが沙耶をはたいた

「ママ？」

「私と壮一郎さんには役割があるのよ。沙耶ちゃん。小室君や平野君にお預けするのが私たちの我儘、お願いだからこれ以上私たちを悲しませないで・・・」

「ママ・・・」

「さあ・・・お行きなさい！！」

「ママ、パパ、大好き！！」

そう言つて高城が俺達の元に走り寄つた

そして、車を動かすため車庫に来た

そこで、高城が叫ぶ

「松戸さん！？・・・いない？」

「お嬢様」

[illegible]

「ひゃあ！？どこから現れるのよ！？」

「ラッキーですよお嬢様、この二台ともEMP対策されています。」

「本当ですか？じゃあすぐに動かせるんですね？」

「ダメージを受けているので調整に時間がかかります」

時間か・・・と思っていると冴子が呟く

「なら……ここを死守する他ないね」

向き直ってみるとそこには大量の奴らが……

そして、**孝が叫ぶ**

「行くぞ!!」

俺は、ライフルから軽機関銃に変えた

「死にたい奴はかかってこいやー！！」

T T T T T T T T

M60が火を吹く

「これじゃあアラモだよ！」

「そんなオチ聞きたくないね!!」

と撃ちながら話していると後ろから静香先生が声を掛けてきた

「みんな!乗って!」

「よし!ストライカーの方に京さん、アリスちゃん、ジーク、冴子が乗ってくれ!」

「分かった!(ワン!)」

そう言って乗り込んだ

「よし、行くぜー!」

ブオオオオオオ!

俺達は勢いよく車庫から出た

松戸さんは屋敷の方に残ったみたいだ

途中、高城会長ともすれ違った。

そして、破れた鉄門から勢いよく飛び出し、住宅街に出た

今は俺達、ストライカーが先頭である

「どこから、抜ける?」

「あそこしかあるまいよ」

そう言っつて冴子が指さした方向には紫藤が乗ってきたマイクロバスが事故っていた

「こんな時に事故るなよ！京さん！」

「は、はい！」

「運転、お願いします。操作方法は普通の自動車と同じですから！」

「わ、分かりました！」

俺はふたを開けてバビロンからジャベリンを取り出した。

そして、照準をバスに合わせて言った

「fire!!」

バシュ、シュイイン

ドッカーン！！

ミサイルは見事バスに直撃して木端微塵となった。

「ふう、間一髪だった・・・」

「おつかれ、大和」

そう言っつて冴子はタオルを渡してきた

「おう、サンキュー」

そして、無線で連絡を入れた

「こちら、大和だ誰か応答してくれー」

「孝だ、そっちは大丈夫か？」

「ああ、こっちは大丈夫、そっちは？」

「こっちも大丈夫、でこの先何だけど、国道に出るから、そこで一旦休憩にしよう」

「OK 了解した」

そう言って無線を切った。

はたして、この先にあるのは何か？それは分からない

だけど、一つ言えることは何もかもが変わったということだ・・・

とりあえず、休もう

秘密の倉庫

「国道」

なんとか、高城邸から、脱出した俺達は、国道まで出てきた。

そこで、休憩を計画していたが……

アアアア

そこに、大量の奴らがいた。

ありすちゃんが言う

「いっぱい……」

孝が奴らを睨むように言う

「どうしろってんだよ!」

逆に俺が言う。

「簡単なことだ、孝」

「どういうことだ?」

「EMP攻撃で、あらゆる音がなくなった今、音が出ているのはこのハンヴィーとストライカーだけだ」

ドドドドド

高城が後に続く

「大和の言うとおりよ、あらゆる音がなくなつてさらにパパ達がダイナマイトまで使つて、音を響かせたんだから、集まってくるのは当然!!」

「だが、今はそれよりもここをどう抜けるかだと思つよ」

と冴子がつ

「ああ、一つ提案があるんだが……」

俺が提案を出す

孝が返事をする

「なんだ？大和」

「この近くに倉庫があつてな、俺が所有しているんだがそこまで行つてみたい」

そう、この近くには倉庫街があつてそこに俺が準備の時、一緒に買った。中に何かあるかは秘密だけどね

「でも、どうやつて？」

麗が聞いてくる

「一旦、引き返して下の道から行く」

「分かった、僕は太和の考えに賭けてみるよ」

と賛成してくれた孝

その後、皆も納得してくれたみたいで付いて着てくれることになった

「倉庫街」

ここには、思ったほど奴らはいないようだ・・・

さて、俺の宝箱を開けますかね」

「よし、ついた」

と言って、一つの倉庫の前に止まった。

「太和、ここには何があるの？」

とコータが聞いてきた。大丈夫、お前が喜ぶ物だから・・・

「じゃあ、開けるぞ」

ガラガラガラ

倉庫のシャッターを開けた。すると・・・

「うつひょー！ー！ー！」

コータが跳ねまわった

「大和！これも、もしかして！？」

「ああ、すべて、買い取った」

倉庫の中には、文字通り軍用車両のオンパレードだった。

日本の最新式の10式戦車から、第二次世界大戦で活躍したタイガー戦車など軍オタに堪らない宝庫となっていた

「大和、どうしたんだ？これ」

孝が質問してきた

「さっきも言っただろ？買い取ったと」

「でも、テレビで見たことあるけど、この戦車なんかまだ新しいやつじゃないのか？」

「ああ、そうだ。でも、裏で根回したからな」

「そ、そうなんだ・・・」

まあといっても各国のお偉いさんにちよつと貢物をすれば簡単に回してくれたからな。いや、お金つて偉大だね！

「とりあえず、コータ」

「なに！」

「お前が好きなのを選ぶ」

「マジで!？」

「本気と書いてマジと読む!」

「よし、分かった!」

と言って、走りながら去って行った。しばらく時間が掛かるだろう
そう思っていると、冴子が寄ってきた

「大和」

「なに？」

「これほどの物、金の方はどうしたのだ？」

「ああ、親が残してくれてたみたいでな。もういねえが」

「!す、すまない」

「気にするな、もう何年も前の事だよ。それに、今の方が楽しいからな」

「どっいつことだ？」

「冴子と一緒に居られるってこと」

笑いながら言った

「！／／／」

照れたようだ。可愛い！！

「じゃあ、俺もコータの方見てくるわ」

「あ、ああ分かった」

そう言っただけ分かれた。

「コータ、どこだ？」

コータを探しに来たのだがどこにも見当たらない。どこに行ったんだ？

「大和！こっちこっち」

と声がしたので行ってみた

「よう、決まったか？」

「うん、これにするよ！」

と興奮しながら、指さした物は……

M1A2エイプラムズであった

「エイプラムズにするのか……」

「うん、こっちの道路は車幅も問題ないからね」

「そうか、で、サブはどうする？」

「サブ？」

「ああ、ここにある奴らは全部自動操縦装置が付いているんだ」

この倉庫にある物は買い取った後、偉い人に頼んで、最新の装置に
してもらっている。

「本当なの！？大和」

「ああ、だが、一台にしてくれ。それ以上だと動かしづらいから」

「分かった。それじゃあ………これ！！」

といって指さしたのは……

「M939ガントラックか……」

「うん、小室と宮本の親を乗せるにしても兵員輸送車は必要でしょ？」

「確かに、よし、こいつをちょっとばかり改造しよう」

「どんな風に？」

「それは、見てからのお楽しみ」

そう言つて、車両に乗り込んだ

〔倉庫内の整備場〕

「さて・・・」

とりあえず、ガントラックを改造するため倉庫内の整備場に来た。
俺だが実は試そうと思つていたことがあつたのだ！

それは、アニメみたく、貨物の方の屋根に砲台は付けられるかどうかということだ！

ふっふっふ楽しみだな

そう思つて作業を開始した

〔孝side〕

俺達は大和が所有しているという倉庫まで来た。中に入ってびっくりした！

テレビとかでしか見たことのない軍用車両が所狭しと並べられていたのだから・・・

コータが持ってきた物にも驚いた！なんと戦車だ！

コータはニコニコしながら僕に言った

「これで、小室と宮本さんの親を探しに行けるね！」

正直、ここまで固める必要はあるのかどうかは僕には分からない。
でも、大和も僕達の我儘に付き合ってもらっているんだ。本人がき
たら、ちゃんとお礼を言っておこう

〈孝side out〉

〈大和side〉

俺はガントラックを整備した。正直、自分でもビックリしている。
まさか、本当にできたなんて・・・

車体

後輪をタイヤからキャタピラに変えた（ハーフトラックのような感
じ）

後ろに連結車両を付けた。（兵員輸送用）

ガントラックの武装

M2キャリバー 二丁

機関砲 二丁（ボンネットの上に取り付けた）

ミニガン 四丁（側面部分）

ホイール トゲ（ボンドカーのあれ）

120mm滑走砲（90式の砲台）

とりあえず、こんなもんか？なんか、兵員輸送車というより攻撃車両になっちゃった・・・まあいいや後ろに輸送用の車両は連結してあるし

出発しようかな？

そう思って皆の所に向かった

く大和 side outく

皆の所に着くと啞然としていた。コートだけは目を輝かせていたが・

「どうしたの？これ」

と高城が質問してきた

「ああ、こいつの場合、奴らに突っ込んだら身動きが取れないうえに横転する可能性が高いと思ってな。だから改造した」

と説明した

「・・・そう」

微妙な間があったが気にしないようにしよう

「それじゃあ、出発しようか」

「あ、ああそうだな」

孝がなんとか復活したようだ。

ついでにハンヴィーとストライカーも交換した

く再び国道く

また、国道に戻ってきた俺達、だが、今度は強い味方がいる

そこで俺は、コータが乗っている戦車に指示をだした

「よし、コータ。いっちょ派手に行ってくれ！」

「サーイエツサー！！」

その返事とともに突進を開始した。

キュラキュラキュラ！！！！

グシャグシャグシャ！！！！

多くの奴らを踏みにじって行った。しかも・・・

「イーヤッホーウ！！！！」

コータは興奮していた。

俺は指示を出した

「よし、皆、コータに続けー！」

そう言って前進を開始した。

ショッピングモール……あのゲームを思い出す……

俺達は国道を抜けて孝達の実家の近くのショッピングモールの付近にいた

「ショッピングモールか……」

やたらとでかいなこのショッピングモール……あのゲームを思いだすな

と考えていると孝に声を掛けられた

「どうした？大和」

「いや、ショッピングモール見てたら俺がやっていたゲームを思い出してね」

「なんていうやつ？」

「デッド○イジング」

「あの18禁の？」

「ああ、」

「へー大和もゲームやるんだ」

「おいおい、俺をどんな風に思ってたんだ？」

「危険人物A」

「……………」

なにそれ？俺って日常でもそんな風に思われてたの？泣いちゃうよ。
俺

といじけていると冴子が話してきた

「そんなことより中に入るぞ」

「ちよつ冴子、そんなことって言いぐさはないだろ！」

「はいはい、文句は後で聞いてやる」

「グスン……………分かったよ」

そう言っ中に入った

くショッピングモール内く

「うおゝなかなか広いな」

中の広さをみて俺は感想を出した。

「とりあえず、手分けして生存者がいるかどうか探してみよう」

と孝が提案を出す

「待て、孝」

「なんだ？大和」

「銃はここに入れておけ」

と言ってバビロンを出した

「なんでだ？」

「すべての生存者が穏和的とは思えない。最悪、武器を強奪される可能性がある」

「確かにな・・・よし、みんな武器は大和に預けておいてくれ」

そう言って皆は武器を俺に預けた

その後、手分けして生存者を探し出した。

案外、簡単に探し出すことができた。

生存者は全部で10人いた

その一人は警察官で婦警の中岡あさみさんだ

「初めまして、小田原大和です。」

「初めまして、あさ・・・本官は中岡あさみです」

と紹介して一旦そこでお開きにした。

それからは、荷物を入れたりして一日が終わった……

「ショッピングモール二日目」

「沙耶さん、これいけますかね？」

俺らは、食糧が足りなくなってきたのでこのスーパーで食糧を集めることにした。まあさすがに俺達の人数じゃ結構消費するからな……

今は精食品を見ている。なぜなら、缶詰などの保存食品はあらかた無くなっていたからだ

「停電は昨日！賞味期限もみて！匂いも嗅いだ方がいい！」

と見ていると

「おい待て！生の肉や魚は干物や燻製にするときめたのに勝手に食うつもりか？こういう時だからこそ、規則を守らないと」

「し、島田さんまつであります！」

「あ？あんたか」

「そ、その子たちは昨日来たばかりでありますから、あさ……本官たちのルールを知らないんでありますよ！」

と言って島田という男に注意した

「チッ！」

ガラガラ

舌打ちをしてカートを押しながら去って行った

「助かりました。中岡さん」

と礼を言うコータ

「とんでもない！当然の事をしたまででありますよ！」

と敬礼しながら言った

「で？昨日バタバタしてて聞きそびれちゃったんだけど、お巡りさんあんたがここをまとめたわけ？」

高城が質問をする

「いえ、あさ・・・本官じゃなくて指導してくれた松島先輩が・・・」

「・・・その先輩は？」

「あつはい！ここの安全を確認してから本署に方に応援を呼ばれに行きました。昨日の午後です。」

と言って外を指さした

「「・・・・・・・・」」

「だ、大丈夫です！先輩は本官と違ってとても優秀な方ですから」と手を大きく振りながら言った。すると・・・

「おい本官のネーチャン、そろそろミーティングの時間だぜ」

「あーはいはい、今行きまゝす」

そう言ってコート達の元を離れた。その後、俺達と合流した

「どうだった？」

「ああ、全部の出入り口を封鎖してある。入られる心配はないな」と俺が答えた

「ベテランの警官がいたらしいわ、立てこもることはできるわね」とほーうベテランの人がいたのなら、心配ないな

と思っていると孝から質問が来た

「なあ大和、昨日銃を隠した理由って・・・」

その質問に対して答えようとしたが代わりに高城が答えた

「ここの連中パパの部下よりまともりは良くないわよ」

「ああ、そんな連中に渡しても弾の無駄遣いにしかない。」

「なるほどな」

「ここはすぐに駄目になる。あんた達は必要な物を集めてくれぐれも先にいた連中を刺激しないで」

確かにな。規律のない連中にインフラが死んでるショッピングモール、三日は持つてもそれ以上にはいかない。最悪の場合奴らの餌場となる

「所で、高城」

「なに？」

「お前はどつするんだ？」

「私は着替えるの！こんなヒラヒラした服装じゃいざって時に動けないでしょ！？」

といってスカートを引っ張りながら言った

「分かった分かった、だから怒鳴るな」

と言って分かれた

く二階部分く

「どつしようかな？」

孝は悩んでいた。さっき、高城に何か言われたらしい。そこで、コ
ータが・・・

「とりあえず婦警さんに話して見ようか？分からず屋って訳じゃないさそうだし」

「やっぱ、銃を隠しておいて正解だな」

「「小室？」」

俺とコータは素っ頓狂な声をだした

「いや、婦警さんの前でさすがに銃を出すってのはちょっと・・・」

そこで俺が答える

「確かに、俺らには二つしか選択肢がないからな」

「二人ともそっち専門だからな。教えてくれよ」

俺の代わりにコータが答えた

「簡単なことだよ。使つか使わないかさ」

と悪人顔で言った

「そうだな」

俺もニヤケながら言った

「二人ともきつついな」

「でも、小室なら分かるでしょ？」

「そりゃあ、まあ」

と苦笑いしながら言った。

その後、俺は孝達と分かれて冴子を探しに行った

「冴子はどこだ？」

「ここだよ。大和」

と声のした方向に向くと服屋にいた

「なにしてるんだ？」

「いや、服を変えようと思ってな」

「じゃあ、付き合ってやるよ」

「本当か!？」

と言って抱きついてきた

「ああ、」

「じゃあ、少し待っていてくれ、着替えてくるから」

そう言って試着室に入って行った

数十分後・・・

「おまたせ」

シャツ

「・・・・・・・・」

俺は見惚れた。

冴子の服装は、黒のロングスカート、更には薄いジャケットを着ていた。

髪形はポニーテール

「どうした？」

「いや、凄く似合ってるから、見惚れてた」

「／／／／」

顔が赤くなった

「そ、それじゃあこれにしようか」

「あ、ああ」

そう言ってそのまま店を後にした。

ショッピングモール・・・あのゲームを思い出す・・・（後書き）

冴子さんの服装をchangeしました。

参考は漫画版の最後に乗っている麗の服装変更の所です

孝とコータの思惑……

冴子と服屋を出てきて孝達と合流した後、あさみさんたちがいる。家具屋にやってきた。

そこで見た物は……

「いつまで、ここにいりゃあいなんだよ!!」

と大声が聞こえた。行ってみるとあさみさんを囲んで皆で言っていた

「すぐに助けが来るって話じゃったんかよ! 外の化け物は増える一方、おまけに電気どころかケータイまでイカレてんじゃない!」

と坊主の男が言う

「わ、わたしはどうでもいいんです! でも、妻は週に一度病院に行つて輸血をさせなければならぬんです」

という老夫婦

「私だつて一刻も早く本社に連絡を入れないとならないんだ!」

と会社員のおっさん

「で、でも、松島巡査は助けが来るまでここで待てと言いました。だから……」

「あんたに俺達を足止めする権利はない!! あるのは、私たちを助

ける義務だけだ！」

なんじゃあこりやまるで規律なんかなくなっちゃあいない。この集団はすぐに駄目になるな

と思っているとコータが口を開く

「駄目だねこの集団は……」

次に孝が言う

「これは……仲間割れか？」

「それならまだ良いよ……集団には目的がある。あの連中にはそんなものない。ただ、警察の権威にすがっていただけなんだ」

「でも、皆で彼女を責め立ててる」

「頼つても意味がないと分かったんだ。助けを待つという希望すら消えうせたんだ。だから、彼女を責め立ててる……小室、僕達には他人を助けてる暇なんかないのは分かってる。」

「そうだ。そんなものはないけど……つまんないなそれじゃ！」

「だから、面白くする！」

と言って二人して悪戯つ子みたいな笑みで言った。

なんだかんだいいながら、二人とも楽しんでるなうだったら、俺も混ぜてもらうか

そう思いながら、二人に近づいた

「二人とも・・・」

「なに？」

「これなんか、使ってみたらどうだ？」

と言って一丁の拳銃を出した

「これは？」

孝が聞いてくる。

それを代わりにコータが答える

「M37オールウェイトだね。今、警察で配備されている拳銃だよ。これならいけるね」

「まあ、せいぜい楽しんでくれや」

と言って俺は引きさがった

「なんとか言ったらどうなんだ！？」

「警察なら外の化け物をなんとかしなさいよ！」

「で、でも、ほんか・・・あさみは警察学校でも成績悪かったし女の子だし・・・」

と今にも泣き崩れそうなあさみさんだった。そこにコートが割り込んだ

「あのーちょっといいですか？」

そこで、会社員が怒鳴った

「大事な話をしているんだぞ！」

「いやー落とし物を拾ったんでお巡りさんに届けないといけないんですよー」

「？落とし物でありますか？」

「これです。警察の銃ですよね？これ」

ざわっ

コートが銃を見せた瞬間、回りの奴らは動揺を隠せないでいた

「あーはい！そうでありますよ！S & W M37エアウェイト！紛れもない県警の正式拳銃であります！」

と叫びながら言った。そこに坊主の男が・・・

「お！すげえじゃん！そいつで化け物をやっつければ・・・」

「でも、銃声を聞くと奴らは群がってきますよ？使うとかえって危険です。弾の数だってここにいる皆さんの人数分しかありません」

とまたもや悪人顔で意味ありげにニヤリと笑いながら言った

「ともかくですね、お巡りさんの銃はお巡りさんが持っていないと・・・じゃ確かにお渡ししましたよ」

と敬礼しながら言った

「はい！ご協力ありがとうございました！」

と敬礼で返してお礼を言った

そして、コートが戻ってきた

「ぬふふ・・・たぶん大丈夫だと思うよ」

「かえってまずくないか？銃をもつてたら・・・もっと責任を押し付けられて」

と孝が困惑な顔で言った。そこで俺が・・・

「昔、イギリスの軍隊じゃあマスケット銃じゃなくて槍を持っていた。今でも、将校は価値の低い拳銃を所持している。どうしてだと思っ？」

と質問した。

孝は考えながら・・・

「うーん身を守るため・・・」

「残念。はずれだよ。答えは集団を維持するためさ。命令に従わない奴を刺殺したり、射殺したりできる立場を形で示しているんだ！」

と俺もニヤリと笑いながら言った

「それを話してきたのか？」

と孝が言う。そこでコータが

「婦警さんが銃を持つてる意味を想像するようにしてきた。少なくとも今までよりはマシだよ」

「だったらいいけどね！」

高城が割り込んできた

「あの連中、とんでもなく追い詰められてるのよ？それに・・・あの婦警に銃が使えるのかしら？」

と最もなことを言った

「警官だから最低限の訓練は受けていますし渡した理由は実際に撃つかどうかじゃなくってですね！」

とコータが反論した。そこで孝が気づいたように言う

「あそこの連中も彼女が打てないとわかったら・・・」

「ま、可能性の話だけど。それに出会った相手をすべて助けること

なんてできやしないから！」

確かにそうだよな。俺達は神様でも何でもないんだ。自分たちが生き残るために偶々、出会っただけという偶然だからな……

と思っていると後ろから服を引っ張られた

「ねーねー大和お兄ちゃん」

ありすだった

「どうした？ありす」

「静香先生、どこ？」

そのことに皆が気づく

「そうだよ。静香先生は！？」

麗と冴子はコーヒー屋にいたからいいとして京さんと石井も食糧集めや荷物の点検をしていたから……だとしたら、静香先生はどこにいるんだ！？

「みんな、しずか「きゃあああ！！！！！！！！！！」」

今の声は静香先生！上の階からか！

そう思ってみんなに言った

「みんな！行くぞ！」

「
応
！」

コータ、恋の予感……

俺達は静香先生の悲鳴を聞いて上の階に走った。

↓3階寝室販売店↓

寝室販売店には静香先生と食糧集めをしていた島田という男がいた

「あ、あのやめてください」

「へへ、そんなこと言いながら本当は誘ってたんだろ？」

「ち、違っんです。私は眠くなっちゃってここにベットがあつたら寝ようと思って……」

「そんなこと、どうでもいいんだよ。いいからヤラセろって」

今にも島田は静香先生に襲いそうになっていた。その時！

「し、島田さん！まつであります！」

「あ？あんたか……」

最初に現れたのはあさみさんだった

「悪いがあんたには興味……！」

振り向いた島田が驚いた。無理もない自分に対して銃を突き付けられていたから

そんな中、俺達も到着した。

「な、なんだよ？俺を撃とっつてのか？」

震えた声で言った

「い、今すぐ止めてください」

カタカタ

そこで島田は気付くあさりさんの手が震えていることを・・・

「どうした？撃つんじゃないのかよ？手が震えてるぜ？」

「う、撃てるもん！」

「じゃあ、撃ってみろよ！」

と挑発をかけていた

「くそっどうすれば？」

と孝が小声で言った

すると・・・

ダッ！

コータが走り出した。どこに向かうのかと思えば、近くにあった工

具店だった。

そこで、キヨロキヨロと見たして、ピアノ線とプラスチックのヤスリを組み合わせた

そして、ニヤリと笑いながら島田の背後に忍び寄った……

俺も島田の前に回り警告を入れてやった

「あんたも、気お付けたほうがいいよ？」

「何をだよ？」

「背後にさ」

そういった瞬間にコータが後ろから手動の首つり機で島田の首に回した

シュル！

「グエツ！？」

「無駄だよ。肉に食い込んでるからね。外すのは無理だ……それより、婦警さんの警告に従うか。僕に殺されるか。どっちがいい？」

そして、島田は気を失い持っていた鉋を落とした。すかさず俺が回収した。

「フンッ！」

ドカツ！ドサツ

こうして、静香先生を助けることができた。

く二階コーヒー屋く

俺達は一団集合して今後のことを話すことにした

「どうすんだ？孝」

「うーん、そうだな。みんな疲れてるし……」

孝は悩んでいるようだ、だが麗が……

「何言ってるのよ！危うくレイプされかけるといふところにいられるわけじゃないじゃない！孝も経験してみるといいわ。マッチョなハードゲイにレイプされかけたら……」

とここにいることを反対しているようだ。そこで、冴子が

「宮本君。そうは言っても準備がな……」

「あたしの家はここから歩いて20分なのよ！」

「その20分が一日かけてしまうことさえある。君もそれは十分に経験しただろ？」

「……………」

冴子の言うとおり今までなら、歩いて20分もかからない場所がやつらがいることによって迂回しなければならなかったり、最悪、倒して進まなければならなかったからだ。

「宮本、出発には準備がいる。準備には時間がいる。それぐらいは分かっているでしょ？」

と最もな事を言った。そこにコータが

「あのー沙耶さん」

「な、なに？」

「あのEMP攻撃って本当に全部の電子機器をダメにしちゃったんでしょうか。落雷防止の設備があるところとか、遮蔽された場所なら、大丈夫な気もするんですが・・・」

そこで俺が答える。

「落雷防止用の施設は駄目だ。作動する前にやられてるよ。遮蔽された場所も電線とかがアンテナの役割を果たしているからな。期待はできない。まあ、核がどこで爆発したにもよるな。だけど、場所が掴めないんじゃない意味がない。」

「はーそうなんだ。」

とコータが感心したように言う

「とりあえず、車のほうは俺があるんだ移動に関しては心配しなくていい。」

「たしかにそうね」

と賛成してくれた高城

そこで俺はみんなに言った。

「とりあえず、必要なものはPCノート、これは情報源になるからな。探し出して損はない。後は、無線機、こいつは期待しないほうがいい。なんせみんな死んでるからな。このショッピングモールの周りの地形も把握したほうがいい。後はガソリンかな？」

「ガソリン？なんでそんなものを？」

と麗が質問してきた

「もしものためさ。奴らがいる中で給油なんかしたくないだろ？それに、今のスタンドはほとんどがセルフだから給油機自体が死にまってるからな」

「なるほど。」

「ま、俺は提案を言ったまでだ。後はリーダーが決めることだぜ？」

と言って孝に振った

「え！？うゝんそうだな……今後は大和の言ったものを優先事項にして探すことにしよう」

と言った。すると高城が

「先にいた連中がよこせって言ってきたら？」

「もちろん、譲るさ・・・ただし、同じものが二つ手に入ったらだけど・・・」

と言った。うわゝ腹黒いなゝまっそうでもしないと生き残れないかなこの世界じゃ

高城がニヤリと笑いながら言った

「我らがリーダーの決定は下ったわ。みんな、開始して！」

「「「「おう！」「」「」

といって全員行動を開始した・・・

ゝ屋上ゝ

ゝコートsideゝ

俺は、小室に頼まれて周辺の地形とどこが通れるかを調べていた。

「あそこは、ダメか・・・」

と言って持ってきた地図にバツをつけていった。

すると・・・

「コータさん」

「はい？」

後ろを振り向くとそこには中岡さんがいた。

「何してるんですか？」

「あつこの辺の道を調べていたんですよ」

「へー！すごいですね。まだ高校生なのに」

「い、いやそんなことないですよ。それだったらさっきの中岡さんのほうが立派でしたよ」

「いやいや、そんなことないですよ。あさみは警察なのに市民を守れなくて……だから……その……」

何やら言いたそうだがはつきりと出てこない

「あつはい？」

「本当にありがとうございました！」

パァー！！

「い、いやあそんなことないですって……」

そう言つて少し休憩がてら中岡さんと話すことにした

「カレシさんに、立派な警察官になって見せるって約束したんです

よ〜
」

「はあ〜それはすごいですね〜」

「そんなことないですよ〜警察学校って結構厳しくて、なかなか外に出してもらえないんですよ〜だから、そのカレシさんとも別れちゃって〜」

と可愛いプンプンをしながら言ってきた

「それは・・・まずいですね〜」

「あ〜そう思いますう？こっ見えてもあさみ、結構尽くすタイプなんですよ〜？」

と言ってきた。これはまさか！？

「それは、ますます、ますます、まずいですね〜」タラタラ〜

「でしょでしょ？だから〜コータさんに助けてもらったとき〜」

と言って近づいてきた。

その時

「お巡りさん！」

坊主の男が息を切らせながら来た

「あの、ばあちゃんやバイことになってる。今すぐ輸血しないとい

けないらしい！近くに病院があるってよ！」

そこで、俺は行動を開始した。

（コータside out）

俺と冴子は使えそうなものを探していたが、途中、お婆ちゃんの方が倒れてしまったというのでみんながいる寢室コーナーに来ていた。

着いてみるとベッドで寝ているお婆ちゃんはとても苦しそうに見えた

「どうなんだ？」

近くにいた孝に聞いた

「よくわかんない。なんか難しい」

「そうか」

そういつた瞬間、静香先生が思い出したように言う

「！RAね」

「あ、いやそんな名前じゃあなく」

「RAは略称です。不応性貧血・・・骨髓異形成症候群とも言います」

「おお！それですわ！」

と喜んだように言うおじいちゃん。するとお婆ちゃんが・・・

「ご迷惑をおかけしてすいません。寝ていればすぐに治ると思いますから」

「心配しなくても大丈夫ですよ」

と天使のような笑顔を見せた。そこで俺が・・・

「天使やな」

とだらけていると

「大和」

後ろに嫉妬神こと冴子様がいました

「な、なにかな？」

「だらけているぞ」

「い、いや」なんのこと「スウ」「ごめんなさい」

ごまかそうとしたが謝ることにした。だって刀を突き付けられたら謝るしかないでしょ！？

そう言っているうちに話が進んでいたようだ

「輸血していたのは血小板？それとも血漿？」

「そこまでは・・・」

「じゃあ輸血パックの色は覚えていますか？赤とか緑とか」

「黄色！黄色ですわ！」

思い出したように言うおじいちゃん

「RAで黄色の輸血パックだから、多分、PCだと思うけど・・・でも、電源が切れてからもう一日経っちゃってるし・・・」

と悩んでいたところ、小室が・・・

「あの血液型さえ合えば僕の血でも・・・」

「ヒヤアン！全血をそのまま輸血するのはいろいろと危険だからダメ。と言ってもあのお婆ちゃんはO型だから血液型は気にしないでいいけど・・・」

「？輸血する場合なら同じO型でないと・・・」

と言いかけたところでコータが息を切らしながら言った

「ゼー、静香先生が言ってるのは血漿の場合、赤血球とは逆になるんだよ。ゼー」

おいおい、あんな息を切らせて大丈夫か？

「それもあっち系で覚えたのか？」

「あっちつてどっちかな？」

こんな時でも漫才を忘れないとはなさすがだぜ。孝&コータ
と思っっていると高城から質問がきた

「んで？どうしたいっていうのよ？」

「この近くに病院があるの。だから取りに行くしか…」

「なんで、あたし達がそんなことを？」

みんな同じだった。他人のために行くなど死に行くようなもんだ
からな

「だって処置しなければならぬから……」

そこで、孝が口を開く

「こんなこと、言いたくないけど、輸血はこの後も続くんですよね
？だったら次は誰が行くんですか？」

「そ、それは……」

「ルールが変わった……か」

冴子が呟くように言う

しゃーないここはいっちょ行きますかねー

「だからどうした？」

「大和？」

「要は、このばあちゃんの輸血パックを取りに行けばいいだけなん
だろ？」

そこで、高城が怒鳴るように言う

「それができないから。言ってるんじゃない。第一私たちは他人を
助けてる暇なんか…」

「だったら、ありすと京さんはどうなる？あの二人は途中からチー
ムに加わった。もし、あの時助けていなかったら、外にいる連中と
同じになっていた。もし、他人を助けている暇なんかなかったら、
俺達はすでに生き残っていなかっただろう。」

そう。他人なんか助けずにつて言ったら俺達はチームを組む前に全
滅し奴らの仲間になっていたであろう。他人を助けることは今の世
の中じゃあ偽善かもしれない。だからこそ、助けることによって自
分たちの精神が保たれているのではないだろうか

「それに、俺らには十分つていうほど武器があるじゃあねえか」

と言って自分の背後を指差した

それを見た。孝は・・・

「なるほどね・・・よし、取りに行くとするか！」

「あ！じゃあ、本官も連れてってください！」

「俺も行くぜ！」

とあさみさんと坊主の男が言った

後は、俺、孝、コータ、計5名で行くことになった・・・

輸血パックどこだ！？

ショッピングモールでおばあちゃんが倒れて輸血パックが必要になったので俺とコータ・孝・あさみさん・田丸さん（坊主の男の人）の五人で向かうことにした。

そして、ショッピングモールからストライカーで移動し、目的地である病院付近まで来た。

（川嶋病院付近）

「あそこか・・・小坊の頃診察してもらったな」

と孝が言う

「お前もかよ？」

と田丸さんが聞き返す

「あなたもですか？」

「あそこの先代、マンガ好きでなマンガ喫茶並みに揃ってたからな」と笑いながら言った

「あ、あのお話の途中ですが・・・」

「あーはいはい。にしてもずるいな銃を隠し持ってたなんて」

実は田丸さんには銃を隠し持つてることをばらした。

すると、コータが・・・

「撃ってみますか？奴らが群がってきますけど・・・」

「冗談はよしこちゃん！俺はハンドガンマニアだぜ？認めるならオートはグロック19、マグナムならデザートイーグルだな！」

と言ったので俺は

「ありますよ？」

「え？」

「だから、ありますよ。その二つとも」

「マジでか！？」

「ええ、」

と言ってバビロンからその二つの銃を出した。

「おお！どっから出した！？」

「それは・・・企業秘密ということでこれはその印にあげますよ」

そう言って田丸さんに譲った

「ありがとう！」

そう話してるうちに病院の方に到着した。

回りは塀で囲まれていたので正面の方をストライカーで塞いだ

「よし、これなら奴らが来ても入ってこれないだろう」

「さすがだね！大和」

とコータが誉めてきた

「ありがとうよ。さて、これからが問題だ」

そう言って病院の方に向き直った

そこで孝が

「いいか、自分で絶対駄目だと思った時以外銃を撃つな。静かに事を進めるぞ。」

皆で確認した後、病院に突入した。

（病院内）

中に入ったが、案の定誰もいない。

俺達は物音を立てないように静かに奥へと進んだ

その時！

ギイイイイ

と扉が開いた。一瞬びっくりしたが何もなかったみたいなので奥へと進もうとした。しかし・・・

ガシャアアアアアン！！！！！！

アアアアアアア

大量の奴らがさっきの扉から飛び出してきた！！

「そら！！！」

俺は即座にバビロンから鎖鎌を出して奴らの首を根こそぎ切り落とした。

しかし、受付台から一人飛び出してきたがコータが下から銃剣で突き刺した。

そこから、慎重に中に入った。すると・・・

アアアア

「ここもかよ！」

と田丸さんが突っ込んだ

「そんなこと言ってないでさっさとやっつけましょう！」

と孝が言った

俺も武器を変えて、妖刀・村正に変えた

「おら!!」

ズバッ!!

あっという間に殲滅した。

「よし、さつさと目的の物を探し出しちまおう」

と俺が促す

すると・・・

「あつた!黄色の輸血パック」

とコータが見つけてきた。

「こっちはいろんな薬を見つけてきたぜ!」

と田丸さんがその他の物を見つけてきてくれた。

「よし、これで目的の物は見つかった。さつさと出よう」

と孝が言った。

そう言って病院を後にしたのだが・・・

アアアアアアアア

正面にはストライカーを壁にして道路側には大量の奴らがいた

「いっぱい・・・」

とあさみさんが言う

「どうすればいいんだよ!？」

と困惑したように言う孝

「どうする?小室」

とコータが聞いている

「今、考えてる!」

どうしようかな?あつ!たしか、ストライカーの中に・・・

「なあ、ちよつといいか？」

「どうしたんだ?大和」

「いや、ストライカーの中にある物があることに気づいてな」

「ある物?」

「ああ、今回はそいつに賭けてみないか?」

「・・・分かった。賭けてみよう」

よし、我らがリーダーの承認は取れた。後は実行するだけだ。

そう思つて、屋根から中に入った

くストライカー内部く

「えーとこの辺に確か……」

あつたはずなんだよな。俺の家からずっと入れっぱの奴がいつか役に立つだろうと思つて入れておいたが正解だったな。

「おつあつたあつた」

と言つて一つの袋を取り出した。

そして、皆のいる場所に戻つた

「大和、何しようつての？」

とコータが聞いてきた。

「まあこいつを見てくれ」

「「「「??」「」」」」

袋を差し出したがみんな分かつてないようだ

「正解は火炎瓶だ」

ニヤリと笑った

「火炎瓶？そんなもの……あ！」

コータは気づいたようだな

「これをどうしよってんだ？大和」

と孝が聞いてきた。

「一つ、貸してくれ」

そう言っつて一つの瓶を受け取り先端にある新聞紙に火をつけた。

そして、俺は叫びながら投げた

「汚物は消毒じゃー！！！」

ひゅっつっつ

バリッ！ボワッ！！

アアアアア

投げた方の奴らは燃えながら倒れていった。

「すごい……」

と孝が言う

「大和、僕も手伝うよ」

と笑いながら来た

「よし、もう一度行くぞ！」

「汚物は消毒じゃあああああ！！！！！！」

と数分にわたり消毒活動をした。

奴らはほとんど全滅した。

そして、俺達はなんとか脱出しショッピングモールに戻った。

「ショッピングモールの休憩室」

「あゝなんとか終わったな」

「そうですね」

今、休憩室には病院に行った五人が休んでいた。おばあちゃんの方はなんとか間に合ったようだ

「にしても驚いたぜ」

「何がです？」

「いや、お前らが良く生き残れたなって」

「ああ、それは・・・」

孝は俺に振り向いて

「全部、彼のおかげのようなものですから」

なんと、俺のおかげって言うのか？

「孝、一つ間違ってるぜ」

「え？」

「俺は、あくまで銃や車両の手配をしたまでだ。実際に行動できたのは孝お前のおかげなんだよ」

「僕の？」

「ああ、自分じゃあ自覚してないだろうがな。それぞれの役割を把握しうまく使ってくれる。まさに適材適所というべきかな」

実際にそうだ。自分の役割も分からずに行けばどんなに強い武器を持とうがあつという間にやられちまう。戦争でもそうだ。うまい指揮官ならばそれぞれの分隊を確実に使える。

それほどまでに孝はうまくなってきたているのだ

「そ、そうかな？」

と苦笑いしながら言った

「まあ、そんなに頑なにならなくてもいい。ただ単に皆をうまく使

ってくれってことさ。俺も含めてな・・・」

「大和、ありがとう」

「気にすんな」

そう言って肩をたたいた

「わん！わん！」

といきなりジークが吠えた。見てみると窓越しに何かに吠えているようだ。

「どうしたんだろ？」

とコータが言う

「行ってみるか」

そう言って全員で行ってみた。そこには・・・

人間が追い込まれた時の行動……

俺達は休憩室で休んでいたところ、ジークがいきなり窓に向かって吠えたのでジークの方に行ってみた。

すると……

「なんだ、何もないじゃん」

と俺が言う。外には数体の奴らしかいない。しかし、ジークは未だに吠えている。なんでだろうか？

「お、おいあれ……」

と孝が指さした方向を見た。そこには一体の奴ら化した婦警だった。

すると、突然

「あ……あああ!!」

あさりさんが声を出した。

「あさりさん。ど、どうしたんですか？」

コータが聞く

「あ……あれ、先輩、うそ……そんな……まっしませんばいいいいいい!……!……!」

なんと、あれは彼女の先輩で東署に応援を呼びに行った人だった。

「な・・・なんで・・・ほ・・・本署に行けなかったんだ!!!!・・・
・・・出た後、すぐ奴らに襲われちゃったんだ!!!!・・・
だれも・・・誰も助けになんて来ない!!!!!!」

ダン！ダン！

窓ガラスを叩きながら大声で泣き叫んだ。そして・・・

「むり・・・むりむりむり!!!!!!あ・・・あさみには・・・
」

と独り言に様に言い始めた

「あさみさん!!」

コータが彼女の名前を呼ぶ

「コータ・・・さん・・・あさ・・・あさみ・・・ちがつの・・・
あさ・・・」

ダッ！

とうとう恐怖を抑えきれなかったのか。屋上へと走り始めた

「いや！・・・いや————!!!!!!」

「あさみさん!!」

コートが呼びとめる

「どこにいくつも「今さら、いい人ぶらないでよ!!!」メガネブタ
!!!!!!」

「あさみは・・・あさみで・・・あさみなんだから!!!!!!」

ダッ!ダッ!ダッ!

そう言って走り去った

あさみさんが走り去った後、俺達は（平野を除いて）急ぎよ会議を行なった

「あの婦警はもう当てにならないわ!いや、警察自体が……………」

高城が今の警察の状況を言った。

確かに、今この状況下で警察がともに機能していないことぐらい分かっていた。

「確かに、ここはもう出た方がいいと僕はそう思っただけど……………」

と言ってコートの方を見た

「ああ、今のままじゃあここを出るとき変な後悔を残しちまうかもしれないな・・・それに、コートがあの状態じゃあ、まともな戦力にならん。だから、孝、お前が何とかしてやるんだ。リーダーであ

る。お前が……」

と俺が言う

「ああ、分かってる。なんとかしてみるよ」

会議の結果、出ることはなかったのだが……その前にコートを
どうにかしなければならぬ。そこは孝に任せるしかない。それで
も駄目なら俺が何とかしてやる。その後、残っている生存者の様子
を見に行った。

「寝室販売店」

俺は見えないように影からこっそりとみた

「救援を呼びに行った婦警がやられたんだ！」

と会社員のおっさんが言った

「我々は警察に守られるべきなのに！」

なんだよ？結局は警察に押し付けて自分達は何もしないってか？ど
こまで都合いいんだよ……

「け・けしからん！最近の警察はたるんどる……！」

「こ、これからどうしたらいいのよ!？」

「安全な場所を探すんだ……」

「安全な場所ってどこよ!？」

「そりゃあ警察とか・・・」

「でも、そこまでどうやって行けばいいんだ? 車は動かないし、歩きたとあのおばちゃん婦警みたくやられるし・・・」

警察が駄目になってるのにまだ、頼ろうとするのかよ・・・もつと頭使えば分かるだろこのバカチン共が・・・

「あの学生達よ! あの子たちと一緒に行けば・・・」

おうおう、今度は俺達を頼ろうつてのか? そりゃあ警察署には行かないやいけない理由はあるけどよ。なんであんならのお守までしなきゃいけないんだ?

「無駄だろう」

島田が静かに言った

「あいつらは自分たちの都合でしか動かないぜ・・・こんな世の中になってまだそう時間は経ってねえ、なのに、銃を握って好きなようにしてるんだ」

「強姦も止めたけどね!」

「んだと!? このババア!」

と言い争っていた。

「最近の若いもんはたるんどる!!」

「何ぼざいてんだよ。じーさん」

そして、会社員のおっさんがいう

「とにかく、安全な場所にだな・・・」

「そんなもの必要あのかよ？ここには食料や水はたくさんある。それがなくなってから慌ててもいいんじゃないか？」

「足りないのは女だけだもんね・・・」

「んだと!？」

あゝあゝこれじゃああつという間にやられちゃうな。こんな奴らと一緒に巻き添えは食いたくないさっさと出ちまうのがいいかもしれないな・・・

俺がそう思っていると、今まで黙っていた少年が言った・・・手に包丁を持ちながら・・・

「死ぬんだよ・・・みんな死ぬんだ!!そして、みんなあの化け物になる!」

あゝとうとう壊れちゃったか。あんなのがいるとこっちまで被害が被る、何とかして静かに出たいなゝ

「あのように俺達まで入れないでくれよ」

「俺は、人を食う映画のファンなんだ！だから分かってる！あの高校生達も駄目だ！銃があつてもすぐやられる！！どうにもできない！！どうにもならないんだ！！！！ヒヤハハハハハハ！！！！」

俺はその声を後に、その場を去った。

（休憩室）

俺は皆の所に戻った。

「冴子」

「大和かどうした？」

「ここは完全に駄目だ。さっきあつちの生存者たちを見てきたが、酷くなる一方だ、早めに出た方がいい。」

「そうか・・・でも、平野君が・・・」

そういつて平野の方を見た

「まだ、駄目なのか？」

「ああ、あれからずっとだ」

「しゃーない」

「大和？」

「おれが何とかするよ」

そう言ってコータの方に近づいた

「コータ」

「あ、大和・・・」

「お前らしくもないな」

「だって・・・」

「俺らは仲間だろ？そうじゃないのか？」

「それは分かってる！！でも・・・」

「それなら、後悔しないうちに行って来い。ここはすぐに駄目になる。お前が引きずってたら、それは、崩壊を意味する。分かるな？」

「・・・ああ」

「だったら、行って来い！！そして、自分の力でどうにかして見せる！！」

「！！・・・ありがとう、大和」

「気にすんな。軍オタ仲の俺たちじゃあねえか」

笑って肩をたたいた

「じゃあ、行ってくる！！」

ダッ！ダッ！ダッ！

これで、後悔なく行けるだろう……

そう思って皆の元に戻った

すると……

「なあ、大和。平野になんて言っただんだ？」

「ああ、後悔ないようにって軍オタ仲の言葉を言っただけさ。それより……」

「なんだ？」

「もう一人、増えるかもしれないぜ？」

ニヤリと笑いながら言った。

「さて、俺達にはすることが山ほどある。リーダー、指示を」

「………ああ、分かった」

そして、行動を開始した。

ここはもうだめだ……

くコータsideく

俺は、大和に後押しされあさみさんがいる屋上に向かっていた……

く屋上く

屋上に着くと体育座りしてるあさみさんを見つけた

「あさみさん!!」

「え?……コータ……さん?」

「一緒に行きましょう!!」

俺は率直に思いをぶつけた

「え?……その、うれしじゃなくて……そのあさみ……
もうお巡りさんの仕事できないからだからコータさんに……
でもコータさんが……」

いろいろ慌てているようだ。だから、俺は、笑ってあさみさんを見た

「連れてってください……あさみ、コータさんと一緒に行きたいです!!」

ガシッ!!

「おい！！手伝え！」

島田が声を出す

「ど、どうすんだよ？そんなもの・・・」

「バリケードを作る。一階はあきらめる！！」

そう言つて、他の人達に手伝わせた

俺は高城の方を見る。

そして、孝が聞く

「どうだ？」

「無理！人手も時間もない。まずは、二階の非常階段！」

「それと、避難ハシゴだな。どうする、リーダー？」

そう言つて孝の方を見た。

「僕と田丸さんで先頭に立つ！殿は平野と大和だ。本当に危険な時以外撃つな！」

ほうほう、様になってきたね。我がリーダーは・・・なら、ちゃんと務めを果たしますか

「お、おい俺達はどうすりゃあいいんだよ！？」

と若い兄ちゃんが聞いてきた。すると・・・

「自分で決めてください。なにもかもおわっ・・・変わったんです。だから決めてください。あ、あさみも自分で決めました。もう警察官はやめです。」

とあさりさんが言ってきた。

さつきとはまるで違うな。ずいぶんと様になってる

そう思っていると冴子が動いた

「急ぐといい」

グサッ！

「もはや・・・時はない！！」

そう言つてエスカレーターから上がってきた奴らを切った

「行くぞ！！」

孝の号令と共に動いた

当初は静かに出るつもりだったが・・・予想外の展開になっちまったな。

先にいた連中は屋上に立てこもるか、一緒に逃げるか迷っているみたいだ

「あたしたちはどうなるのよ!!」

そこで孝が答える

「知ったこっちゃない」

普通なら非道とも言えることだがこの状況になつては関係ない。生き残るためにしていることだからな

「知ったこっちゃないっておい！」

「けが人だっているんだぞ!？」

俺は静香先生の方を見た。

「大丈夫、大事じゃないわ。」

「だよ。一緒に来るのか？」

「俺も一緒に逃げろぜ。ここに居てもどうしようもないしな」

と言つて島田さんが来ることになった

「それで? あんたらはどうするんだい？」

「わ、私は屋上に立てこもる」

「私も・・・」

と言って島田さんと田丸さんとあさみさん以外は屋上に残る方を決めた

「だったら非常階段までは援護してやるよ」

俺はニヤツと笑って銃を見せた

そして、冴子が言う

「急いだ方がいい。奴らは待ってくれない」

「非常階段付近」

俺達は何とか非常階段付近に来た。先頭はコータとあさみさんが行った

後方は俺と冴子で守っている

「どうしてもいかないんですか？」

孝が最後にもう一度聞いた

「やっぱ挑戦とか冒険は性に合わねえわ。じゃあな！」

「ご武運を」

そう言って残り組は階段を昇った

孝の方を見ると少し寂しそうな顔をしていた

だから、俺は言った

「孝、彼らは自分たちで決めたことだ。それを曲げるわけにはいかない。それに、すべてを救えないとは前にも言っただろう？」

「・・・ああ、分かってる。それより今は・・・」

「ああ、いかに脱出するかってことだ」

そう言っただけで、駐車場の方を見た。

ストライカーなどは入り口付近に止めておいたのだがここからだと若干、遠い。それにこの大人数じゃあ静かになど100%できるわけではない

「大和、どうする？」

孝が聞いてきた

「そつだな、高城」

「ええ、まず、先頭に孝・宮本。左に私と島田。右に大和・毒島先輩。後方にコータとあさりさん。中心に静香先生・ありす・京さん。その護衛に田丸・石井が付いて」

そこで、俺が付けたす

「このフォーメーションは絶対維持、ベトナムやイラクで米軍がトラック輸送部隊を護衛する時と同じだ」

「分かった。皆もいいな？」

全員が頷く。

そして、行動する

（駐車場）

俺達は何とか静かに移動してストライカーに後ちよっとつてところで……

「たすけてーーーーー!!」

声のする方向をみると少年がバンの上から助けを求めている

「非常口、開けたのあいつだな」

と孝が言う

「ああ、そうだろうよ。だが、自業自得だほっとくぞ」

と俺が言ったが……

「そんな！ひどいですよ！大和さん！」

反抗したのはあさりさんだった

「あいつ自身を助けていたら、こっちまで被害を被っちまう。そんなのはごめんだ」

そう。前にも言ったと思うが、いちいち助けなんか差し伸べていたらそれこそチーム全体を破滅へと導いてしまう

「だからって！」

「あさりさん」

コータが呼びかけるが・・・

「こうなったら、私が助ける！！」

そう言つて少年がいる方に走って行つた。

「あ、あさりさん！！」

コータも行こうとしたが

「待て、コータ」

俺が呼びとめた

「なんで、止めるんだよ！！」

「お前まで行つたら戦力が減るだろう」

「でも！」

は、なんで俺っていつもこんなだろうな

「お前に行く必要はない。代わりに俺が行ってきてやる」

「大和、なんで？」

「性分っていうのかな？まっ俺が原因だし・・・」

そう言ってると思子が近づいてきた

「大和」

「悪いな。一生のお願いここで使っていい？」

「ふっそれならば必ず帰って来い」

チュッ

そう言った後、俺達はキスをした。周りがどう言おうが関係ない

「プハッじゃあ、行ってくる」

「ああ」

そう言っであさりさんの後を追った・・・

少年がいる車付近

俺はなんとかあさりさんに追いついた。

「あさりさん！」

「や、やまとさん！？どうして」

「そんなの後回しです。今は目の前の事に集中してください!」

そう言つてバビロンからM60を出した

ドドドドドドドドドドド!.....!

「オラオラオラオラ!.....!」

近くにいた奴らは細切れになった。

「あさみさん、ショットガンは使えますか!」

「は、はい!」

「じゃあ、これを使つてください!」

そう言つてバビロンからM870を出し渡した。

しばらく撃つてはいたもの、奴らはどんどん集まってくる。どつすれば!?

俺は撃ちながらも一つの手段を取ることにした.....

「あさみさん!」

「は、はい!」

「その車の屋根に昇ってください」

そう言つて近くのバンの屋根を差した

「わ、分かりました。」

そう言つて屋根に昇った。

それを確認した後、俺はあれを出すことにした。

これなら、広範囲に奴らを倒せるぜ

左手を上げこう言つた。

「ゲート・オブ・バビロン（王の財宝）！！！」

そう言つと空が赤く染まり中から無数の武器が出てきて・・・

シュシュシュシュシ！！！！！！！！

ザザザザザザザ！！！！！！！！

俺の周りには無数の武器と奴らの死体だけだった

「よし、あさみさん。もういいですよ」

「え？わあすごい」

あつという間に倒せたことに感動していた。

「それから、その少年、もう逃げていいぞ。ただし、俺達に付いて来るな。」

殺気にもじりませ言ってやった

「う、うわあああああ！！！！！」

少年は叫びながらどこかへ行った

「や、大和さん、」

「はい？」

「あ、ありがとうございます。そして、ごめんなさい」

「どうして、謝るんですか？」

「だって、あさみさっき、酷いこと言っちゃいました。」

「ああ、気にしないでいいですよ。それより皆のところに帰りましょ
う」

「・・・・・・はい！」

そう言っただけとあさみさんは孝達の元に戻った

くストライカーが置いてある場所く

「皆、今戻ったぜ」

「大和！！」

ガシッ！！

「おおつと冴子、いきなり飛びつくなよ」

「仕方ないだろ？愛する人が無事に帰ってきたのだから」

「まあいいか。ただいま冴子」

「お帰り、大和」

そう言つて抱き締めあつた

「おゝい二人とももうそろそろいいかな？出発したいんだけど」

と孝が言つてきた

「悪い悪い。それじゃあ出発するか」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

こうして、俺達は地獄のショッピングモールから脱出する事が出来たのだつた

宮本の家

ショッピングモールから脱出した俺達は宮本の家に移動していた。

移動の際、それぞれの車両に移動した。

ハンヴィー

静香先生・麗・孝・沙耶・田丸

ストライカー

俺・冴子・京・ありす・ジーク

M939ガントラック

島田・コータ・あさみ・石井

という形で乗っていた。

数分後……

キーッ

前のハンヴィーが停車した

「ここがそうなのか？」

「ええ、」

一軒の家の前に止まった俺達、突入班は決まっていた

突入班

麗・孝・冴子・沙耶・田丸

の五人で突入することになった。俺はストライカーの整備があつたため残ることになった

「それじゃあ、気お付けろよ」

「ああ、分かっている」

そう言つて麗達は家の中に入って行つた

「さて・・・と」

俺はストライカーの整備に入ることにした

まず、固定武器として30mm機関砲を取り付ける。

こいつは、コンピューター制御で自動的に撃ってくれる便利なものだ。もちろん弾無限

それから横に大型の荷物入れを装着する。これは幅が大きくなるが、その分容量がいい

と整備をしていると・・・

パン！

麗の家から一発の銃声が聞こえた。きっと手遅れだったんだろう

俺は次にハンヴィーのほうに手をつけた

固定武器は、M2キヤリバー

そして全体を装甲板で覆った。これなら多少の衝撃は抑えられる

そして、麗たちが家から出てきた。

麗は無言のままハンヴィーに乗った。俺は沙耶に声をかけた

「間に合わなかったか……」

「ええ、彼女の母親はすでに奴ら化していたわ。とどめは麗自身が・
・」

「そうか……孝」

「なんだ？」

「彼女を支えられるのはお前だけだ、傍にいてやれ」

「ああ、分かってる」

そう言ってハンヴィーに乗り込んだ

「これからどうする？」

俺が沙耶に聞いた

「丁度、この近くに警察署があるの、とりあえずそっちに行つて、麗のお父さんも探してみましよう。」

「こつちにはいなかったのか？」

「ええ、彼女の母親以外にも複数いたけど、どれも違ったみたい」

「そうか。まだ希望はあるんだな」

「ええ」

そう言つて今後の計画を話し始めた

く孝sideく

僕は麗が気になってハンヴィーに乗り込んだ

「・・・・・・・・」

乗ると麗は俯いたまま無言だった

「麗」

「・・・・・・・・なに？」

「お袋さんのことは残念だった。」

「ええ」

麗は完全にダメになったのかもしれない。だから僕は・・・

ギュッ

「孝？」

「今、泣いとけ。後悔が残らないように・・・」

「う・・・うう・・・あり・・・がと・・・」

その後、麗は思いっきり泣いた。

数分後

「孝・・・ありがとう」

「気にするな。麗が悲しむところは見たくなかったんだ」

「ふふっありがとう」

そう言っ僕と麗はキスをした

＼孝side out＼

あれから俺たちは移動を開始した。

＼ストライカー内部＼

「さて、警察署はどうなってるかね」

俺が言った

「恐らくは機能していないだろう。」

冴子が答える

「でも、生き残りぐらいいて欲しいね」

「確かにな」

そう言い合っていると無線から

「大和、すぐ近くに銃砲店があるよ」

相手はコータだった

「本当か？コータ」

「うん、あさみさんが言ってたから間違いないと思うよ」

「そうか、ハンヴィーの方は誰か知ってるか？」

ハンヴィーの方に聞いてみた

「パパに聞いたことあるけど、でもどうするの？」

「決まってるだろ？弾集めさ」

「分かったわ。行ってみましょ」

そして、進路を変更した

（銃砲店前）

俺達は銃砲店の前にいた。店自体はシャッターが閉まっており、きつと店主がここで閉じこもっていたんだろう

店の周りには奴らが数体いた

車両の方はエンジンを切り待機していた

そして、無線で役割を聞いた

「孝、どうする？」

「そうだな。大和とコータはこっちの専門だからな二人が行ってくれ」

「分かった。後、二人ぐらい連れてってもいいか？」

「ああ」

よし、とりあえず

「冴子、行けるか？」

「ああ、心配しないでくれ」

そう言って刀を差しながら言った

「よし、コート」

「なに？」

「島田さんも連れてこう」

「どうして？」

「この中で一番力持ちだ」

そう、いくら銃を撃っているコートや俺でも弾を大量に運ぶとなれば相当の力がある。そこで大工をしていた島田さんの登場ってわけだ

く銃砲店内く

ガラガラく

周りに注意しながらシャッターを開けた。中は思ったより広く、いろんな銃が置きっぱなされていた

「結構残ってるな」

「そうだね。ここの店主、急いで避難したみたいな感じだね」

よく見てみると、奥の方が書類や備品などが荒らされていた

すると……

アアアアア

奥から奴らが現れた

俺はバビロンから槍を出して静かに殺した

ザシュッ

「相変わらず、見事だな」

「そう誉めるな。よし、手分けしてあたりを探すか」

「「「「分かった」「」」」」

そう言って手分けで探すことにした・・・

お宝、発見!!!

俺達は、麗の家を出た後、警察署に向かうことになっていた。しかし、途中銃砲店があったためそこに寄っていくことにした

（銃砲店内）

俺達は慎重に弾薬探しをしていた。

俺は今、コータと行動している。

「コータ、そっちは何か見つけたか？」

「いや、まだ、そこらじゅうに書類みたいなのは、落ちているけどね」

コータの言つとおり、そこらじゅうに書類が落ちていた。きっと店主が慌てて避難したことを疑える。

「しかし、妙だな」

「そうだね。こんなにも銃があるなんて」

確かに、普通、外の連中があんな状態なのは見ているはずだ。なのに、銃どころか薬莢までないとはどういうことだ？

何か臭うな……

そう思っていて奥の部屋に突入した。中は表と比べてきれいなもんだ

「クリア」

とコータが安全確保を宣言した

俺はミニミ軽機関銃を下ろした

「よし、何かないか探ってみよう」

「そうだね」

そう言って搜索を開始した。

数分後……

「！大和！」

コータが何か見つけたらしい

「どうした？コータ」

「これ見て」

と言って指差すところを見た。床の所に何か擦れたような跡があった。しかも、扉みたいな擦れ後だった

「コータ、この後ろに何かあるぞ」

「分かってる。きっとこの中には……」

銃であろう

「でも、どうやって開けるの？」

とコータが聞いてきた

「そりゃあ、決まってるだろ。どこかにスイッチがあるはずだ」

「じゃあ、探してみよう！」

また、搜索を開始した。

すると……

「大和、あつたよ！」

「よし、押してみろ！」

「うん！」

ポチッ

しゅん

「あれ？」

ガン！

「ぎゃあー!？」

「コータ!？」

コータがスイッチを押したと思ったら、扉は開かずコータの頭上に何か落ちてきた

「大丈夫か!？」

「うん、大丈夫、でも何が……」

と言って辺りを見回すとそこには……

「タライ?」

大きなタライがあつた

「ドリフか!!!」

俺は思わず突っ込んだ

「大和、何言ってるの?」

「気にするな」

そう言つて再び搜索した

すると……

「おっ?これか?」

ポチッ

ギイイイイイ

「大和！」

「ああ、分かつてる」

今度こそ扉が開いた。中を覗いてみると・・・・・・・・

「いーやっほー！ーう！ー！！！！！」

コータが乱舞した

「こ、これはすごいな・・・・・・・・」

俺も思わずつぶやいた

中であつたのは軍オタには堪らない。宝庫となっていた

「こ、これは！？スパス１２！！生産が中止になった自動ショットガンだよ！！！」

あゝあまた、始まつたよ

「AK47アサルトライフル！！ソ連が作り出した最高の銃だよ！！こつちにあるのは、RPG-7、ロシアの対戦車ロケットランチャーだよ！！！」

とコータの銃講義が数十分に渡って行われた。

そして・・・

「気が済んだか？」

「う、ごめん」

俺は、店内に散らばっている皆を呼びに行った。そして・・・

「おいおい、ここは日本か？」

と島田さんが言った

「この店主、こんなところに隠してあったとはな」

後から、田丸さんも無線で呼んだ、この店主とは知り合いだったようだ

「それじゃあ持ち出しますか。あつ弾薬類だけでいいですよ。銃器は俺が持ちますから」

「おいおい、いくらお前さんでもこの数はさすがに・・・」

「大丈夫ですよ」

そう言ってバビロンを出した

「！！！？」

島田さんは驚いたようだ

「なんだそりゃあ」

「これが、俺の特殊能力ですよ。武器類は持ち運べますから」

「ふうんそいつは便利だな」

島田さんは感心したように言った。

その後、全員で弾薬類を運び出し、店に残っていた銃もいただく事にした。

そして、出発を開始した。

「警察署付近」

俺達は警察署付近まで来ていた。

先頭はストライカーだ

しかし、目の前には

アアアアアアアアア

大量の奴らがいた。それも警察署を目指すように・・・

「奴らでいっぱいだな。」

冴子が言ってくる

「そうだな。でも、こっちに反応しないってことは・・・」

「中に人間がいるという証拠だな。」

すると……

パン！パン！

「！今の音は……」

冴子が反応する

「ああ、間違いない、生き残りがいる」

俺が応える。そして、無線機で

「みんな！聞いてくれ！たった今、発砲音を聞いた。これより警察署に突入し中にいる生き残りを救うぞ！！」

「『『『『『『了解！！』』』』』」

こうして、突撃を敢行した

お宝、発見！！！（後書き）

「はい、作者です」

「大和だ」

「いやゝもうすぐ、警察署に着くね」

「ああ、そうだな」

「中には誰がいるのかな？」

「そりゃあ、警察の人間だろ」

「そりゃあそうだけどき、もっと特殊な人達だよ」

「??」

「まっそれは、次で楽しみにしててね。それはそうと……」

「どうした？」

「大和と冴子のラブラブシーンが書けないよー!!」

「ぶっ!!お、お前何言ってんだ!？」

「いやゝそんな照れなくていいよゝ大和君。俺も冴子さんのことは好きだから」

「そういうことじゃあねえ!!」

「いいよな」冴子さんと付き合えて、俺も冴子さんみたいな人と付き合ってみたいよ」

「おまえ、ちよつと黙つてろや」

ガチャン!

「え?ちよつ・・・まつ・・・」

「fire!!」

ガガガガガガガ!!!!!!!!!!!!

「ぎゃああああ!!!!!!!!!!!!」

ドサッ

「最後にRPG!!!!」

バシユウ!!!

ドカーン!!!

「あれー!!」

「汚ねえ花火だ・・・それじゃあ、気を取り直して、次回! ついに大和と冴子が○○だ!絶対見るよ!って作者あああああ!!!!!!出てこおおおおおい!!!!!!バラバラに

してやる!!」

えゝ上のは遊びなので気にしないでください。

では、次回もよろしく!!

警察署（前書き）

あの二人組が！？

警察署

俺達は麗の親父さんがいる警察署を目指した。そして、警察署に着く寸前で銃声を警察署から聞いたので、突撃を開始した。

（南side）

私たちは洋上空港からなんとか脱出して、警察署に辿りついた。

パン！パン！

「リカ、どうするよ？このままじゃあ弾が尽きるぜ。」

こいつは田島、私がSATニッパ配属されてからずっと一緒にいる相棒だバディ

「とりあえず警察署に入りましょう。弾ぐらいなら残ってると思うし」

「よし、どっちかが残らなきゃな」

「そうね・・・」

「ジャンケン・ポン！！」

この方法は私たちが最初に決めた”ルール”だった。

今では馴染んでるけど・・・

「かーっまた負けかよー！しゃあねえー！！急ぎで頼むぞー！！」

「ええ！わかって・・・」

いるわと答えようとしたとき

ブオオオオオ！！！！！

ドドドドドド！！！！！！！！！！

アアアアアア

「！リカ！」

「ええ、生存者がいたみたいね！」

そう言いながら再び奴らの方に銃口を向けた

（南side out）

「よし！皆、突っ込むぞ！！」

俺が無線で叫ぶ

「了解！！」

残り二台の答えが入ってきた

「よっしゃあ！！！！ストライカーの本領発揮だぜ！！」

そう言ってコンピューターを操作してストライカーの固定武器30

m m機関砲を奴らに向けた

「撃て――！！！！」

ドドドドドドドドドド！！！！！！！！！！

アアアアアア

奴らは弾をくらって細切れになっていった

「よし、全車両、固定武器を使え！」

そう言つて、道路にハンヴィー、ストライカー、ガントラックが横に並びそれぞれの固定武器を使用した

ドドドドドドドドドド！！！！！！！！！！（ハンヴィーの固定武器）

ドツドツドツドツドツド！！！！！！！！！！（ガントラックの固定武器）

ドドドドドドドドドド！！！！！！！！！！（ストライカーの固定武器）

そして、辺り一面は血の海となった

「気持ち悪い」

俺が感想を言つた

「良くそんなことが言えるな」

冴子が言つてきた

「だって、さすがにね？」

「今まで、散々やって来たくせにか？」

「……そこは突っ込まないでくれ」

「まあいい、それより生存者は……」

そう言つて冴子がふたを開けて望遠鏡で眺めていた

「いたぞ。二人だ」

「警察関係者だろうな。よし、そっちに行つてみよう」

そう言つて警察署の前に移動した

（警察署前）

警察署の前に止めると二人の男女が出てきた

「警察特殊部隊SATの南リカです。こっちが……」

「田島だ。よろしく！」

そう言つて敬礼した

「俺は藤見学園2年B組の小田原大和です。」

「藤見学園！？」

リカさんが学校名に反応した

「どうかしたんですか？」

「いや、その学園の校医が私の友達なの・・・」

「ああ！静香先生ですか？」

「そう！」

「彼女なら・・・ほら、」

そう言っつて俺は指さした

「リカーーーー！！！」

ポヨン！ポヨン！

大きな双子山を揺らしながら友達の名前を呼んだ静香先生

「静香！無事だったのね！」

「うん！私はなんとか、リカの方は大丈夫？」

「ええ、私はなんとか・・・でも、空港はもう駄目よ。奴らでいっぱいになった」

そう言っつて田島さんが付け加える

「俺達は何とか脱出したんだが、あつちが手が付けられなくてな。だから、警察署に戻ってきたわけだ」

「そうだったんですか。でも、生き残りがいて良かった」

「ああ、こつちもビックリしたが良かったよ。それにしても・・・」

「??」

どうしたのだろう？

「これは、どうやって手に入れた？」

そう言つてストライカーを指さした

「ああ、これですか？俺の私物ですよ」

「「えっ!？」」

リカさんと田島さんの声がハモった

「どういふこと？」

とリカさんが質問してきた

「いや、ネットとかで全部落としたんすよ。」

いや、落とした時は最高だったな、誰も手、上げないんだもん

「ほう、そいつはすごいな」

「それより、警察署の方には誰か生き残りはいましたか？」

俺が質問した

「いや、俺達もさっき着いたばかりでな。まだ、中を確認してないんだよ」

と田島さんが答えた

「そうですか。じゃあちよつと手伝ってもらえますか？友達の親が
ここの署員なんですよ」

「そうね。私たちも弾薬は補給したいから一緒に行くわ。とりあえず、中に入ったら？」

ガラガラ

そう言つて鉄門を開けてくれた

「分かりました。」

そう言つて俺達は警察署に入った

（警察署の駐車場）

俺は、皆に南リカさんと田島さんを紹介した。それぞれ簡単な自己紹介をしてブリ フィングに入った

進行は孝だ。

なんで、俺がやらないかって？面倒臭いからだ！

というか、リーダー的な素質はないからな。昔っから

あれ？前にも言った気がする………まあいいか

「それじゃあ、一階を島田さん・田丸さん・の二人。二階に麗と僕・あさみさん・コータの四人。地下駐車場に田島さん・リカさん・大和・冴子さんの四人だ」

と孝が配置場所を言っていく

「小室、私とかは？」

「沙耶はここに残ってそれぞれの報告を聞いてくれ。石井と京さん、ありすちゃん、静香先生もここに残ってください。」

「……わかった（わ）」「……」

「よし、行くぞ！」

孝達が行動を開始した。

「さて、俺達も行くかね？リカ」

「ええ、二人とも付いて来て」

「「分かりました」」

そう言つて地下駐車場に向かった

「孝side」

僕たちは麗の親父さんがいる二階の刑事課に向かった

「孝」

麗が声を掛けてきた

「なんだ？」

「もし、お父さんが奴らになった時は……」

「言つな。まだ希望を捨てちゃあいけない」

どんなときだってそうだ、希望を捨ててはいけない

「……そうね。ありがとう、孝」

「気にするな」

「二階、刑事課」

「酷いな……」

「ええ、」

「ここまでなんて」

「確かに・・・」

二階に着いた四人は刑事課の惨状を見て臆した

いたるところに血が飛び跳ねていたり、死体がそのまま残されていたのだから

僕たちは慎重に奥へと進んだ。

辺りを搜索したが、中々麗の親父さんが見つからない。どこに行ったのだろうか？

結局、刑事課の部屋、すべてを見回ったがどこにもいなかった。

しばらくしてコータ達も戻ってきた。

僕はコータに聞いた

「どうだった？」

「どこにもいないね。死体とかも調べたけどそれらしい人はいなかった」

ということはあの電話の後、ここから脱出したというわけか？それとも・・・

警察署（後書き）

麗の親父さん行方不明！！

さて、どこに行ったのでしょうか？

地下駐車場

↓地下駐車場↓

俺と冴子、リカさん・田島さんの四人で地下駐車場に来ていた

「思ったより広いな」

と俺が感想を述べた

「ここは前は美術館で市が買い取った物を警察署に組み替えたらしい。ここも、その名残という訳だ」

と田島さんが説明してくれた

というか、どこのバイオだよ。警察署が美術館だったなんてどっかに仕掛けでもあるんじゃないか？

「とりあえず、手分けして搜索してみしよう」

とリカさんが提案してきた

「そうですね。二人一組で搜索して、何か見つけた時は無線で連絡して下さい」

と俺が言う

「分かったわ。じゃあ私たちはこっちの方を搜索してみるわ。行くわよ田島」

「へいへい」

と言って西側の駐車場を調べてくれることになった。俺達は東側である

く東側地下駐車場く

「なあ大和」

冴子が話しかけてくる

「なんだ？冴子」

「この先はどうするのだ？」

「って言うとな孝のお袋さんとか麗の親父さんを搜索した後ってことか？」

「ああ」

「そうだな、俺的には電気が生きている所を探し出して、そこで暮らすことになるかなくでも、自衛隊とかが生きていたらそこに避難することかな？」

「でも、そう言う所は厳しくなるんじゃないのか？」

「ああ、それは第一の目標だがそれが出来なかった場合のさっきの事だ」

「どこか探し出して、そこで暮らすことになるか……だが、そんな所はあるのか？」

「探し出して見ないとさすがに分からないな。でも、冴子が一緒にいるから何処だっていいんだがな」

「や、大和／＼／」

冴子は照れた

「可愛いな」

とその時！

「大和君、聞こえる？」

無線の相手はリカさんだ

「どうしました？」

「ちょっとこっちに来てくれる？ 気になることを見つけたの」

「分かりました。ちょっと待ってて下さい」

「行くぞ。冴子」

「ああ」

そう言って西側駐車場に向かった

〽西側駐車場〽

「リカさん！」

「大和君、こつちよ」

と言ったので声のした方向に向かった

「どうしました？」

「ええ、これを見て頂戴」

そう言つて指さしたものは……

「血痕？」

「ああ、しかもまだ、新しい」

「ということは生存者か！？」

「そうかもしれないけど、一応注意しておいて、血はこの先の整備場が続いてるわ」

「分かりました。では行きましょう。二人は武器は持っていますか？」

「ええ、でも弾が少ないわ」

「俺もだ」

「じゃあ、武器をあげましょう」

そう言つてバビロンからモスバーグM500と9mm機関拳銃を出した

「それ、どこから出したの？」

「まあ企業秘密つてことで受け取ってください」

そう言つて武器を渡した

「とりあえず、詮索は無しにしとくよ」

「そう思つてくれてありがたいです」

「じゃあ行くわよ」

「」「」

そう言つて整備場に突入した

（整備場）

俺達は整備場に突入して驚いた

「こ、これは……」

田島さんが驚きながら言つた

一旦普通に思えたが、整備場の真ん中で一人の男が倒れていた。片

手に紙を持って・・・

「生存者がここで息を引き取ったのか・・・・・・・・」

俺達は死体に黙祷した

「調べてみよう」

俺が言った

「そうね、何か分かるかもしれない」

そう言つて死体を調べ始めた

（数分後）

「！これは！」

「どうしたのだ？大和」

「冴子、すぐに麗と孝を呼んできてくれ」

「どうして、その二人を？」

「この死体は・・・・・・・・麗の親父さんだ・・・・・・・・」

「！！・・・分かった」

その後、すぐに麗達が駆け付けた

「お父さん!!」

「……麗か」

麗が駆け付けてきたがすぐに泣き崩れた

「そ……そんな……お父さん……なんで!？」

「親父さんがこの手紙を持っていた。」

そう言って先ほどの手紙を渡した

「……」

麗は黙って手紙を読んだ

その間に孝に言う

「孝」

「なんだ？」

「この町からは出よう。ここには……悲しみが多すぎる」

「ああ」

そう言って麗の方を見た

「お父さん……今までありがとう」

麗は親父さんとの最後の別れをしたみたいだ。そして孝の方に歩み寄った

「孝」

「麗、この町からは出よう。悲しみが多すぎる」

「ええ、そうね」

そう言って表の駐車場に向かった

「俺達も行こう」

田島さんが言う

「ええ、そうですね」

そう言って地下駐車場を出た

「表の駐車場」

俺達は元の駐車場に集合したが田丸さんと島田さんが戻ってないことに気付いた

「田丸さんと島田さんは？」

沙耶に聞いた

「まだ、戻ってきてないわ。どうしたのかしら？」

そう言っていると警察署から・・・

ダァン！

「「「「「「！！」」」」」」

一発の銃声が聞こえた

「行こう！」

俺が叫ぶ

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」

そう言って突入した

一発の銃声・・・・・・・・そして、別れ

ダァン！

その一発の銃声が静かな街に響いた。

そして、俺が声をかける

「行くぞ！」

「」「応！」「」

そう言つて、俺、孝、コータ、田島さんが動いた

「警察署一階」

俺達は島田さんと田丸さんがいる一階に突入した。そこで見たものは・・・・・・・・

「」「」「なっ！？」「」

俺達が見たものは大量の奴らが群がっていた

「クソッ！！どうしてこんなにいるんだ、さっきまでいなかったのに！！！」

と孝が言う

「今はそんなことを言ってもしょうがない。とにかく島田さんと田

丸さんを探すんだ!!」

そう言つてバビロンからガトリング砲を取り出した

キュイイイン

ドルルルルル

アアアアア

多くの奴らが砕け散つた

「よし、コータこいつを使つて援護射撃をしてくれ!」

そう言つてナイツSR25を取り出した

「これは、ナイツSR25!!OK!!」

そう言つて即座に援護射撃を開始した

ダアン!ダアン!ダアン!

「よし、コータが援護しているうちに二人を捜すぞ」

「「応!」」

そう言つて大群の奴らに突っ込んだ。と言つてもさっきの攻撃でほとんどは細切れになっているため動きやすくなっている

俺と孝と田島さんはくつついてそれぞれの援護を行った

「そうだな、外の連中も心配だ」

と田島さんも賛成した

そして、コータのところまで戻ってきた

「田丸さん、無事だったんですね!」

「応! なんとかなお前らが来てくれなかったら奴らの仲間入りしていた」

と再開を喜んだその時!!

ドン! ドン!

「くくくく!」

外から機関砲の銃撃音が聞こえた

「行こう!」

孝が叫ぶ

そして、外に出てみると・・・

アアアアア

大量の奴らがいた

「クソッ!! これじゃあどうにもならん!」

田島さんが言う

「もうここから脱出しよう。皆！それぞれの車両に乗るんだ！」

俺が指示をする

そして、それぞれの車両に乗った。

俺もストライカーに乗った

「大和！無事か？」

「ああ、冴子、大丈夫だ。よし、しっかり掴まってる！」

ブオオオオオオ！！！！！！

そう言って先陣を切った

「歯あ食いしばれよ！！」

そう言って奴らに突っ込んだ！

ドカ！グシャ！ドカ！グシャ！

嫌な音が車内に響いてるがもう慣れたことだ

そして、なんとか奴らの群れから逃げ出すことができた

くストライカー車内く

「ふう」

危機を通り過ぎたことによりため息をついた

「男子がため息とはかつこ悪いよ」

「んなこと言っても、しょうがないだろ」危機が過ぎたんだから」

「それもそうか。お帰り大和」

「ただいま、冴子」

そう言つてキスした

「孝だ。大和、聞こえるか？」

「ああ、もう！いいとこだったのに邪魔をしてくれたな小室君」

俺は無線機をとった

「どうした？孝」

「この先がお袋のいる御別小学校だ。そこに向おう」

「分かった。じゃあお前らのハンヴィーが先頭に立ってくれ」

「分かった」

そう言つたあとハンヴィーが出てきた

残りは孝のお袋さんだけか、生き残つてるといいな

俺達は仲間を失った。しかし、挫けている場合じゃない。俺達は先に進まないで死んでいった奴らの分もしっかりとな……

一発の銃声・・・・・・そして、別れ（後書き）

ついに、最終局面にたどり着くか!?

床主市小学校

俺達は警察署を脱出した後、孝のお袋さんがいる床主小学校を目指していた

それで、俺は無線で孝に今後の事について話し合うことにした

（ストライカー内部）

「孝、この後の事はどうする？」

「この後の事って？」

「お前のお袋さんがいるにしろいないにしろ、どの道出発しなきゃならん。その事についてだ」

「……学校を脱出した後は、港に向かって使えそうな船があるかどうか探して、あったらそのまま脱出、なかった場合は、このまま車列を組んで車で床主市を出る」

「そうか、分かった。」

そう言って、無線を切った

すると、冴子が話しかけてきた

「小室君はなんて？」

「小学校を出た後は港に行つて船を捜す。なかったらこのまま車で

出るそうだな」

「そうか。見つかるといいね。」

「ああ、俺もそれは願ってる事だよ」

いくら、他人の親と言えどこのご時世だ。生き残っててくれた方が嬉しいに決まってる。だが、生存の確率は低い。なぜなら、彼の親も学校の先生だ藤見学園がああなったら小学校なんざもつとひどい事になってるかもしれない

そう思いながら、俺らは小学校へと走らせて行った

く床主小学校く

数十分して小学校に着いた。

中は悲惨な状況だった。いたるところに死体は溢れ、また、奴ら化した小学生が多数いたからだ

俺達は門前でそれを見ていた

「ひでえな」

俺が言った

「ああ、お袋、無事だといいな」

小室が答える

「ほら、孝！そんな暗い顔しないの！ちゃんと希望を持って、ね？」

麗が孝の事を励ます

「ああ、皆これが最後の我儘だ。最後まで頼む！」

そう言ってお辞儀した

「なぐに、言ってた孝。仲間が困ってる時、助けてやらんでどうする？」

俺が言う

「そうだぞ。小室君、ここまで来れたのも君のおかげだ。その恩返しとってくれる」

冴子が言う

「そうだよ。小室、そんな辛気臭い顔しないでさ。明るく行こうよ！」

コータが言う

「孝お兄ちゃん無理してる？」

ありすが言う

「外は怖いけど、皆と分かれるのはもっと嫌よ」

静香先生が言う

「孝！いい！」

麗が言う

「みんな……ありがとう！」

孝が涙を流しながら言った

「それじゃあ、いっちょ派手に行きますか！！」

俺がそう言ってバビロンから四連装ロケットランチャーを出した

「fire！！」

バシュ！！

ドカーーン！！

そう言っただけ俺達は小学校に突っ込んだ

（小学校内部）

俺達は突入に成功し無事に小学校に入る事ができた

「さて、このまま団体で動くのは効率が悪い、だから分かれて動いた方がいいと思うのだが、孝、どうする？」

俺が提案を出す

「そうだな。一階を田島さん・リカさん・田丸さんの三人で、二階は僕・麗・コータの三人、三階が大和、冴子さんの二人、残りは車両に残ってくれ」

「心！」

そう言って俺らは行動を開始した

三階

俺と冴子は三階に移動して小室のお袋さんを探すことになった

ガラツ

「うん、いねえな」

さつきから、教室を中心に搜索していた

「そうだね、小室君の母上はこの階にはいないのかも知れないね」

「そうだな、他の部屋も調べてみよう」

「そうだね」

そう言つて他の部屋にも行つてみたが、孝のお袋さんはいなかった。仕方なかったので二階に行つてみた

二階

「孝、応答してくれ」

「どうした？大和」

「三階を搜索したがそれらしき人物はいなかった。だから、お前らと合流するよ」

「分かった。どこら辺に居るか分かるか？」

「え」と音楽室の付近の階段に居る」

「分かった。すぐ行くよ」

そう言つて無線を切つた

数分後、小室達と合流した

そして、そのまま職員室に向かつた

「職員室前」

職員室の前には多数の奴らがいたしかし、ほとんどが子供だった

「うーんやっぱり大人がいないな」

俺が言う

「そつだな。お袋はどこに居るんだろ？」

孝が心配そつに言う

「しゃーないこっちは俺と冴子で片づけるから、小室達は職員室の中を調べてくれ」

そう言ってバビロンからM16A2を出した

「分かった。気お付けろよ」

「そっちな」

そう言っただけでそれぞれの役割を果たすために動いた

「そろそろ、子供だからって容赦しねえぞ！」

ダダン！ダダン！ダダン！

アアアアア

二、三体奴らを連続で倒した

「ハア！！！」

ズバッ！ズバッ！

アアアア

冴子の方も順調に倒していった

そして……

「ふう〜終わったな。冴子」

「ああ、そのようだな」

「それにしても、遅いな孝達。」

「そうだね。見に行ってみるかい？」

「そうだな。報告も兼ねていくか」

中に入ろうとした時だった

ダン！

「「！！」」

中から銃声が聞こえた

「孝！！」

急いで中に入ってみると・・・・・・・・

孝の前に一体の死体があった

「孝、それは」

「ああ、お袋だった・・・・・・・・もう、手遅れだったよ・・・・・・・・」
涙を流しながら言った

「そうか、残念だったな。」

俺にはそれしか言えない。

「・・・・・・・・ああ」

「じゃあ、俺と冴子は一階に戻って皆に伝えてくる。決心がついたら来てくれ」

「・・・・・・・・ああ」

そう言っただけで俺と冴子は職員室を出た

「残念だったな。」

「ああ」

その後は無言が続いた

そして、俺らは一階に戻って皆に伝えた。

一階で留まっていると孝達に戻ってきた

「・・・・・・・・」

孝は黙ったまんまだ

仕方ない事か、身内が死んでしまったのだからな

「孝、もう後悔しないくらい泣いたか？」

「・・・・・・ああ、大丈夫だ。皆、行こう」

そう言って俺らはそれぞれの車両に乗り込んで学校を後にした

この先、世界はどのように変わっていくのか。最悪の場合、俺達人類が滅びるかもしれない。

だったら、その運命に抗ってやろうじゃないか。俺の命尽きるまで・
・・・

床主市小学校（後書き）

はい、これにて、第一弾学園黙示録は終了します。

今まで、読んで下さった方々本当に、ありがとうございます。

今、第二弾学園黙示録も書いていますので、そちらも読んでいただければ幸いです。

では、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6787o/>

学園黙示録～転生者～

2010年12月13日22時46分発行